

1988
8

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1988年8月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
 十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン
 顧問：ヒュー・W・ピノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、キース・W・ウィルコックス
 編集長：ヒュー・W・ピノック
 教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン
 編集主幹：ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル、アン・レムリン
 制作：レジナルド・J・クリステンセン
 マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン

聖徒の道 1988年8月号第32巻8号
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-440-2351
 印刷所 株式会社 精興社
 定 価 年間予約 海外予約2,200円(送料共)
 半年予約1,100円(送料共)
 普通号150円, 大会号 350円

International Magazines PBMA8808JA
 Printed in Tokyo, Japan.
 Copyright © 1988 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎0427-96-2820

Published monthly by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$1.75 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America. Subscription information telephone number 801-531-2947.

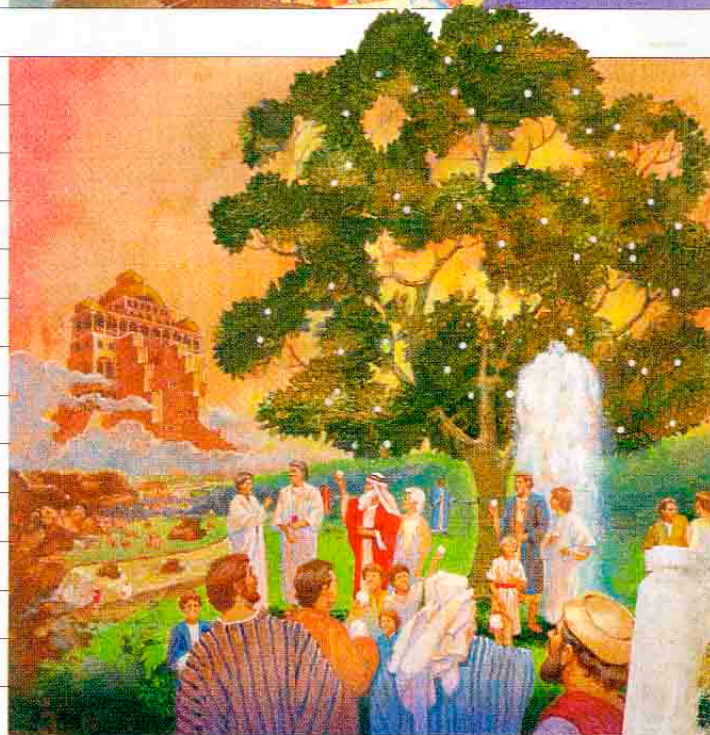
POSTMASTER: Send form 3579 to "Seito no Michi" at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America.

● — も く じ —

幸福な人生の探求	トーマス・S・モンソン	2
喜びと悲しみ		
——リーハイから学ぶこと	キーツ・K・ヒル	8
神殿でエンダウメントを受けるために		
——家族のための手引き		13
家庭訪問メッセージ		
愛は、いらだたない		18
豊かな実り		
第1回末日聖徒イエス・キリスト教会国際美術コンクール参加作品の紹介		19
訪問教師より愛をこめて	メリンダ・サットナー	23
「己が言葉にて」	サンドラ・ウィリアムズ	25
ジェイミー	サンドラ・C・プリンリー	29
聖霊を伴侶とする	カーロス・E・エイシー	34
我が家を訪ねてくれたベンソン大管長		
——ホームティーチャーを通じて	ジョージ・D・ダラント	39
——若人のために——		
父からのメッセージ	レイ・L・バックナード	40
あなたの知らない両親のために	ジェリー・ダナウェイ	42
ふぶきの中のレッスン	ロナルド・J・ダン	48
チャーチニュース		
各地のたより		
子供のページ (別冊付録)		
わたしの兄弟、あなたに平安があるように	ニーナ・ルイス	2
おもちゃばこ	ロバータ・フェアオール	5
日曜日の箱		6
ほのおの輪		8



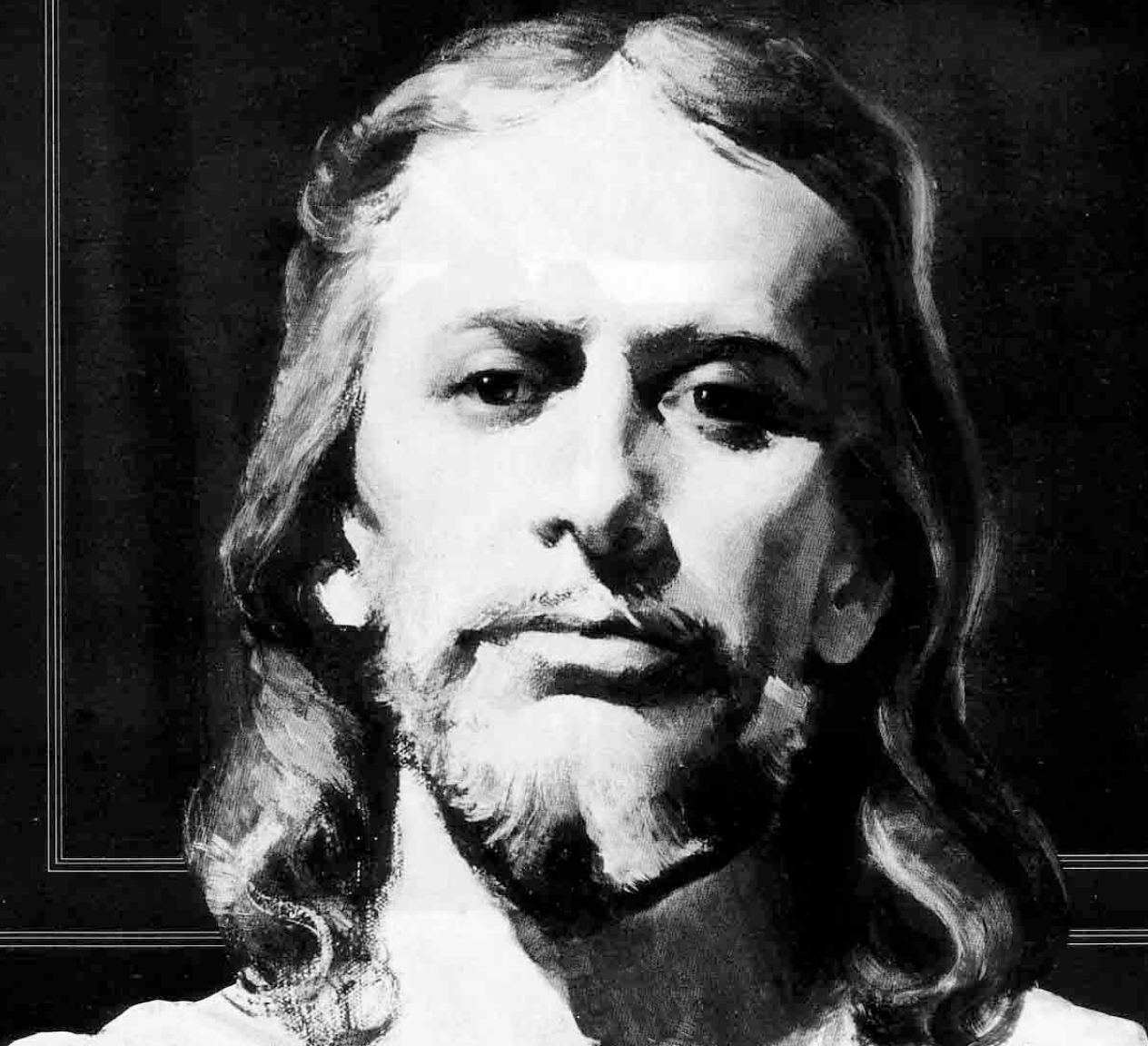
表紙：「主は、言われた全ての事柄
を成就されたもうた」（油彩画）
クラーク・ケリー・プライス作
ノアの箱舟に乗り込んでゆく動物
たちを描いたもの。これは教会主催
のコンクールに出品された作品のひ
とつである。本誌「豊かな実り」で
このコンクールについて紹介してい
る。



大管長会メッセージ

幸福な人生の探求

第二副管長 トーマス・S・モンソン





私たちは皆、自分の人生を喜びと感動に満ちあふれたすばらしいものにすることができます。昔の航海者や探検家は、長い船旅のあとに地の果てに到達しました。私たちが彼らと同じような旅をすることはないでしょう。しかし、霊的な意味での探検家となって、よりよい生き方を発見することにより、この世界をさらによくしていくという理想を

追求していくことはできます。

この地球という世界や広大な宇宙の探求にせよ、正しい生活を送るための原則の探求にせよ、その過程で、勇気をもって困難に立ち向かい、落胆しても快活さを忘れず、成功しても謙虚さを失うことのないよう自分を強めていかなければならないという点では同じです。

神が人類に与えてくださったのは未完成の世界でした。それは私たちが自分たちの様々な技術を用いて物事を成し遂げていくようにするためです。神は雲の中に電気を、また地中に石油を備えてくださいました。しかしご自分から、川に橋を架けたり、森の木を切り出したり、町を築いたりはされませんでした。人間に与えられたのは、元になる材料を用いて努力する機会であり、完成品がもたらす安逸ではありません。絵を描き、歌を歌い、問題を解決するように求められているのです。それによって私たちは、創造の喜びとすばらしさを知ることができます。

しかし、この半世紀の間に、人々の生活規範は、多くの面で低下の一途をたどってきました。この現象は緩やかですが、絶えず続いてきました。

金もうけのためなら何でもする風潮、人間性を喪失した科学、徳を伴わない知識、犠牲の精神を求めない宗教、良心を忘れた快樂の追及、理念のない政治、楽をして富を得ようとする傾向など、枚挙にいとまがありません。

イギリスの有名な作家チャールズ・ディケンズは、2世紀も昔に名作「二都物語」の冒頭において、次のように書いています。

「それはおよそ善き時代でもあれば、およそ悪しき時代でもあった。知恵の時代であるとともに、愚痴の時代でもあった。信念の時代でもあれば、不信の時代でもあった。光明の時でもあれば、暗黒の時でもあった。希望の春でもあれば絶望の冬でもあった。前途はすべて洋々たる希望にあふれているようでもあれば、また前途はいっさい暗黒、虚無とも見えた。」(中野好夫、皆川宗一訳「二都物語」河出書房新社)

もちろん彼が私たちの時代を知っていたはずありません。しかしこれはまさしく現代を言いあてた言葉といえることができます。

人生の豊かさを、この世的な楽しみや安逸によってはかるのは誤りです。真に豊かな人生とは、飽くことのないぜいたくな生活を送ることではありません。お金と引き換えに得られる楽しみを、幸福や喜びと考えている人もいますが、そのような生活を豊かな人生と呼ぶことはできません。

律法に従うこと、人を尊重すること、自分自身を治めること、喜んで奉仕すること、これらが豊かな人生を作る要素となるものです。

これらの大切な事柄をよく理解できるように、その一つ一つについて考えてみたいと思います。

律法に従う

多くの人々に尊ばれ、よく知られている行動規範について考えてみましょう。それはありとあらゆる苦難に対して導きとなるものです。この律法に心を向ける人は、シナイ山から発せられたあの声をあたかも自分自身に向けられたもののように感ずるのではないのでしょうか。

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。

あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。

あなたの父と母を敬え。

あなたは殺してはならない。

あなたは姦淫してはならない。

あなたは盗んではならない。

あなたは隣人について、偽証してはならない。

あなたは隣人の家をむさぼってはならない。」(出エジプト20：3-4, 7-8, 12-17)

モーセの律法が与えられてから長い年月が過ぎました。そして時の絶頂に入ると、大いなる霊的な賜を与えられました。その力は武器よりも強い力であり、カイザルの像を刻んだお金などは比較にならない永続的な価値を持つ賜でした。王の王、主の主と呼ばれるお方が、律法の様々な原則に加えて、愛の教えを与えてくださったのです。

皆さんは、ある律法学者が主を試そうとしてした質問を覚えておられることでしょうか。「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか。」

主はこれに対して次のように非常に重要な答えを与えられました。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』

これがいちばん大切な、第一のいましめである。

第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』(マタイ22：36-39)

これは神の律法です。この律法を破る人は、永遠の苦しみを受け、これに従う人は永遠の喜びを刈り取ることがで

きます。

国法に従うことも忘れてはなりません。国法は、行動を束縛するというよりも、むしろ私たちの自由を保障し、大切な生命を守るためのものなのです。

法律をねじ曲げて解釈したり、違法行為を見過ごしにしたりする人がいます。彼らはそのようなことさえなければ

尊敬に値する人々なのです。犯罪者への処罰を手控えたり、法の網の目をかいくぐって罰を逃れようとする人が多くいます。また今は無責任な行為や、違法行為が^{まんまん}かつてなく蔓延している時代です。今こそ基本的な法秩序の維持に立ち返るべき時です。この秩序は正直な人々が法を擁護するとき確立されていくものです



ビジネスの世界での自分の経験から、経済的な分野における法律への従順という点についても述べてみたいと思います。個人であれ、会社であれ、取入以上の支出を続けながら、健全な財政状態を保っていくことはできません。この法則は人間だけでなく、国家にも当てはまります。法律ではなく、自分勝手な理屈によって、経済的な事柄の決定

をすれば、後に来るのは無秩序と混乱以外の何ものでもありません。

ある聡明な人は、「法律は、人生というゲームを行なうためのルールである」と言っています。しかし、実際はそれ以上のものです。法に従うのは、幸福な人生の探求を成功させるうえでも欠かせないことなのです。



人を尊重する

次に、ほかの人々を尊重することについて考えてみましょう。これも幸福な人生には欠かすことのできないものです。人間には、隣人や神に誉れを帰するよりも、自分だけの誉れを追い求める性向があります。私たちはどこに住んでいようとも、決して自分ひとりだけで生きていくことはできません。自分自身は恵まれた生活をしていながら、貧しい暮らしをしている隣人に対して冷淡であってよいはずがありません。

ここにひとつの不変の原則があります。すなわち私たちは人に与えれば与えるほど、受けることができるのです。私たちは自分が得たもので生活をしますが、真に豊かな人生を送るには、人に与えることを学ぶ必要があります。

使徒パウロは長老たちに向けて次のように言っています。「『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである。」(使徒20:35) これは私たちが考えている以上に深遠な意味を持つ真理です。さらに言えば、非常に実際の真理でもあります。

主は愚かな金持ちのたとえ話の中で、はっきりと次のように言われました。「『あらゆる食欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである。』」

そこで一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。

そこで彼は心の中で、「どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが」と思いめぐらして言った、「こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。

そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ。」

すると神が彼に言われた、「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そして、あなたが用意した物は、だれのものになるのか。」

自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである。」(ルカ12:15-21)

互いに心からの思いやりを示し合う人々は、その祝福として幸福な生活を送ることができます。特にまだ結婚していない人々に勧告しておきたいことがあります。夫婦の絆を永遠のものにしたいと願うなら、それなりの気配りや心がけが必要になります。夫婦は互いに十分な気配りをしながら、お互いに適応していかなければなりません。また互いの問題の解決を目指して取り組んでいく姿勢も必要です。一致するためには互いに喜んで与え、受け合うことも求められます。また、何事においても自分のことより相手の気

持ちになって物事を考えるという精神も必要です。これが相手を大切にすることであり、幸福な人生を探求するうえで欠かすことのできない要素なのです。

自分自身を治める

高潔な人格を備えているかどうかは、その人が自分の自尊心を傷つけるようなことを言ったり、したりするかどうかを見れば、最もよく判断できるのではないのでしょうか。

人が生きていくうえで必要なもののひとつに、選択能力があります。正しい選択能力を身につけるには、自分自身について、また様々な物事についてどのような考え方をすべきか理解する必要があります。また、生きるとは、様々な困難を克服していくことであるということも理解しなければなりません。人生に問題はつきものです。大切なのは、問題に負けないようにすることです。

自分自身を治めるための戦いでは、少しは傷ついたり、疲れ果ててしまうこともあるでしょう。しかし、それは必ず私たちが進歩向上させてくれます。自分を鍛えるのは決してなまやさしいことではありません。努力も苦勞もせず、自分を高めたいと考える人が非常に多くいます。

ある人々は努力もせず、自分にできるはずのこともしないでその言い訳だけをしています。「ほかの人々と違って、若いころによい機会に恵まれなかった」とか「私には肉体的な障害があるから」などという言葉をよく耳にします。しかし歴史を振り返ると、肉体的な障害を持ちながら、偉大な業績を残した人を数多く見いだすことができます。ギリシャの詩人ホメロス、イギリスの詩人ジョン・ミルトン、アメリカの歴史家ウィリアム・プレスコットなどは、格好の言い訳の材料を持っていました。彼らは皆、目が見えなかったのです。アテネの最高の雄弁家と言われたデモステネスも肉体的な障害を持っていました。彼は肺が弱く、しわがれ声で決して美声の持ち主ではありませんでした。そのうえ、どもるような話し方をしていたのです。ドイツの偉大な作曲家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベンも、耳がまったく聞こえなくなってからも作曲をやめませんでした。彼らはその気になればいくらでも言い訳することができたのですが、決してそのようなことをしませんでした。

現代社会はめまぐるしい速さで変化しています。科学は信じられないほどの進歩を遂げています。医学の発展もまさしく驚異的です。地球の内部や宇宙の探査にもただ驚くばかりです。

しかしこの科学時代にあって、人間は、宇宙を征服しても、自分自身を治めることができないでいます。そして心の平安をあきらめてしまっているのです。

人間は現代の科学技術により、高速で宇宙を飛んだり、原子力で静かに何の苦もなく海を航行したりできます。人

間は鳥のように飛んだり、魚のように泳げるのです。そのことを考えれば、大地の上を人間らしく歩けるようになってほしいと思います。

宇宙の探査が驚くべき成果をあげているのに比べ、人間が地上で成し遂げてきたことには、ほとんど見るべきものはありません。たとえばコンピュータですが、「タイム」誌はこう述べています。「コンピュータはビジネス界を変えつつある。コンピュータは科学、医学などの分野で人類に新たな視野を与え、教育技術の変革、行政の効率化などに貢献してきた。」

確かに、コンピュータは、加減乗除の計算を行ない、ほかにも様々な仕事をこなすことができます。しかし、この機械が思考力を持つようになる日がいつかやって来るのでしょうか。そのようなことは絶対にあり得ません。確かに人間の思考プロセスを早めはしましたが、コンピュータは福千年を象徴するものでもなければ、人間の頭脳に対抗できるものでもありません。どれほど複雑な機械を発明できたとしても、それに命を与えたり、理性や判断力を与えることはできません。

なぜでしょうか。それらのものは神聖な賜であり、神のみこころによって与えられるものだからです。

神はかつてコンピュータを作られたことがあります。それは細心の注意をもって作られました。たとえ現代のすべての科学者の力を結集しても、足下にも及ばない精密なものでした。主要構造体は粘土で作られ、その中には視覚、聴覚を通してあらゆる種類の情報を絶えず収集するシステムが埋め込まれました。また、すべての経路を清潔に保ちその機能を果たさせるための循環系、エネルギーを供給するための消化器系、各部門の刺激伝達と調整を行なう神経系なども備えられました。エデンの園に横たえられたそのコンピュータは、現代の最高のコンピュータをはるかにしのぐものでしたが、やはり命を持っていませんでした。それは、記憶や計算を行ない、複雑きわまりない方程式を解くために作られたものでしたが、まだ欠けているものがありました。

神は「命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。」(創世2:7)

現代のコンピュータがいくら進んでも、人間以上の力を持ち得ない理由がここにあります。神は人に命を与え、さらに、考え判断し、愛するための力を与えられたのです。私たちはこのような力を授けられています。が、幸福な人生を送るためには、自分自身を治めなければなりません。

喜んで奉仕する

自分のことを考えているだけでは、真の幸福を見いだすことはできません。喜んでほかの人のために働けるようになるまで、人生の真の意義を知ることはできないのです。

奉仕は義務と関連があります。私たちは義務を果たすことによって、真の喜びを得ることができるのです。

私たちの責任は若人のために働くことではないでしょうか。それに関して注意しておきたいことがあります。若人に必要なのは批判の言葉よりも、良い模範です。今、私たちがどのような家に住み、どれほどの貯金を持ち、どんな服を着ているかなどということは、100年もたてばどうでもよいことになってしまいます。しかし、今私たちが子供たちにより影響を与えておこなら、世の中も少しはよくなっていくのではないのでしょうか。

ハンス・セリエは次のように賢明な言葉を残しています。「多くの人から寄せられる感謝の思いは、富や権力などよりも、大きな心の安らぎを与えてくれる。」(「生活の中のストレス」p.287)

これが奉仕のもたらす喜びです。

教育、経験、知識などは、自分の選びによって身につけるものであり、上手に用いなければなりません。良心、愛、信仰は私たちの進むべき道を示してくれます。これらは精微なものであり、神から与えられるものです。

皆さんが、律法に従順に従い、人を大切にし、自分を治め、喜びをもって奉仕の業を行ない、幸福な人生を探究していくときに、大きな成功を得られるように願っております。

また、幸福な人生とは何かを示してくださったイエス・キリストから心の平安をいただき、それを常に保ち続けることができますように。□

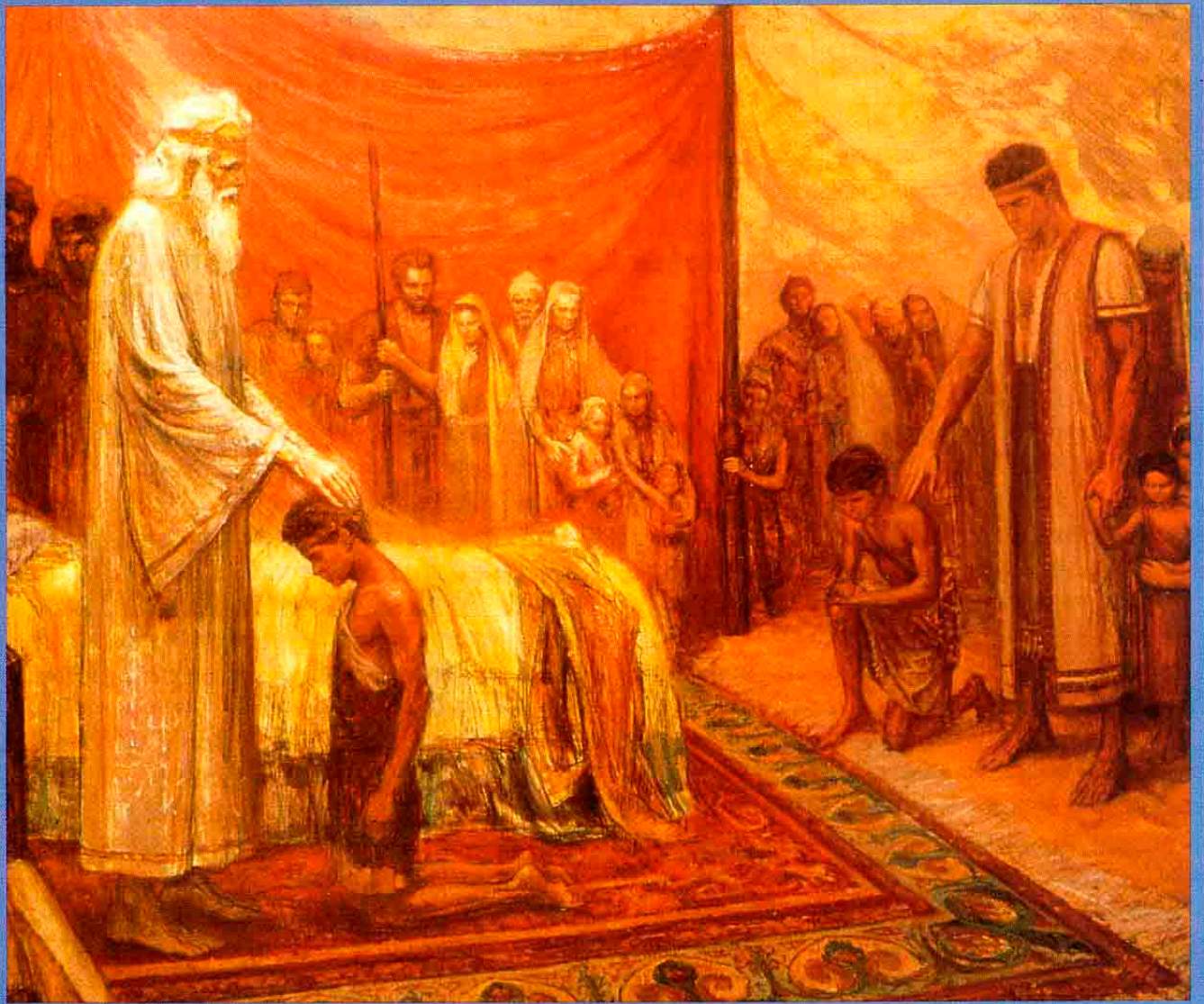
ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うとよいでしょう。

1. 幸福な人生の判断基準を、安逸、ぜいたくに置いている人がいるが、それは間違いである。
2. 幸福な生活に伴う喜びは、律法に従い、人を大切にし、自分を治め、喜んで奉仕することにより得られる。
3. このメッセージに述べられている原則を実践する人は、主が約束された平安を得ることができる。

話し合いを進めるために

1. 人生の真の幸福を見いだすことについて、あなたの考えを述べる。
2. このメッセージの中に、家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や話はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておいた方がよいだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。



喜びと悲しみ

リーハイから学ぶこと

キーツ・K・ヒル

数年前、ある親しい友人を訪ねた私は、異常なまでに気落ちしている友人の姿を目にすることになりました。学校の教師をしている彼、外に仕事を持たない専業主婦の奥さん。ふたりは9人の子供を抱えながら、経済的にもぎりぎりの暮らしをしていました。

近況を尋ねてみると、問題を知られなくなさそうに最初は躊躇^{ちゆうちゆう}していた彼が、涙を浮かべながら子供たちについての悩みを打ち明けてくれました。息子のひとりが高校を中退して家を出、酒やたばこに溺^{おぼ}れ仲間とのパーティに興じていること、18歳の娘が過ちを犯し、神殿外での結婚を予定していること、そして16歳のもうひとりの息子もかなり深刻な麻薬とアルコールの問題を抱えており、その治療費に伝道中の長男への資金援助が脅かされ、家計も苦しくなっていることなどを話してくれました。

彼は自責の念にかられ自分を価値のない者だと思い始めていました。また家族間のそうしたひずみから、彼と奥さんは子供のことでお互いを責め合い、結婚生活自体が重い空気に包まれていました。福音に添った生活をしていながらなげ子供たちがそのような道に走ってしまったのか、私には彼の無念さと共に心の葛藤^{かつとう}がよく伝わってきました。

多くの末日聖徒は幸福を願って熱心に福音の道を歩み出しますが、予期せぬ問題や困難にぶつかり圧倒されてしまうことがよくあります。そうなると、つらい気持ちから、神の愛を疑ったり、決心がぐらついたりしてきます。また自分を信仰から断ち切り、罪から来る苦痛から逃れたいとも思うようになります。

そのような苦痛を味わっている人々は、荒野でのリーハイの経験に多くのことを学ぶことができるに違いありません。リーハイは主に命じられたとおりに、熱心に新たな経験に挑戦しました。しかし何年かたった後、彼は荒野で経験した苦痛や心痛を次のように述べています。

「私の末子であるヨセフよ。私は今汝^{なんじ}に語り聞かせる。汝は私が艱難^{かんなん}をした荒野で生れた。まことに、私がかつとも憂い悲しんだころに汝は母から生れたのである。」(II ニーフアイ 3 : 1)

リーハイのように、自分がいわゆる「艱難をした荒野」の中にいることに気づく人がいるかもしれません。すなわち自分にはどうすることもできない状況によって、愛する人々から孤立してしまっている人々です。そのような人々は、どんなに安らぎを求めても得られるものは絶望感しかないことが多いのです。

しかしそのような経験でも、私たちが成長していくうえで大きな力となることがあるのです。マービン・J・アシユトン長老はこのように言っています。「偉大さというものは、一見まったく不公平で不条理な、不当な人生の出来事に直面したとき、その人がどのような反応を示すかによって一番よく知ることができるのです。」(『もし汝よくこれを耐え忍ばば』「聖徒の道」1985年1月号、p.23)

リーハイのように正しいスタートを切る

リーハイはエルサレムにおいて、自分と家族のために快適な生活を築いてきていました。しかし主のみ声を聞いて、彼の心と霊は平安と喜びに満たされたのです。イエス・キリストの贖^{あがな}いによりもたらされる愛に思いを向けて得られる喜びと希望に比べれば、この世の富は取るに足らないものでした。彼の霊にとっても、その愛は甘い果実に匹敵するものでした。

もし人が良いスタートを切り、その状態で進んで行けば当然結果は良いはずで、同様に、良くないスタートを切り、その状態を持続していけば当然結果は思わしくないものになるでしょう。リーハイは正しい良いスタートを切りました。彼は主イエス・キリストへの信仰を実践し、偽善を行なうことなく真心から罪を悔い改めました。悔い改めることによって彼は赦^{ゆる}しを得、聖霊を伴侶とすることができたのです。このように正しい生活をしてきたリーハイは、当然のことながら「艱難をした荒野」のために備えられていったはずで、

リーハイは信仰を持ち、常に感謝することを忘れなかった

リーハイの荒野への旅は、主を信ずる信仰の実践でした。聖典にはこう記されています。「父は自分の家と相続した土地と、所有の金銀および貴重品をあとにのこして、ただ妻子と食糧と天幕のほかは何ももたずに荒野へ旅立った。」(I ニーフアイ 2 : 4)

共に3日間荒野の旅を続けた彼らは、ついにある川岸の谷にやって来てそこに天幕を張りました。聖典にはこうあります。リーハイは「石で一つの祭壇を築き、主に捧^{ささげ}物を捧げてわれらの神である主に感謝をした。」(I ニーフアイ 2 : 7) 荒野にいた間、リーハイは常に主を思い起こし、戒めを守るように努めました。どのような立場、状況に置かれようとリーハイはみずからへりくだって神を礼拝し、主の慈悲と祝福に感謝しました。リーハイを愚かなことを

する老人と思った人もいたことでしょう。それでも彼は「神は、神を愛する者たち（に）……万事を益となるようにして下さることを」（ローマ8：28）知って天父を信頼し続けたのです。

家族のための神の計画を示現で見たリーハイ

リーハイは正しいスタートを切り、感謝の心で神への信仰を実践したにもかかわらず、悩みから解放されることはありませんでした。彼が感謝の捧物を捧げていたときでさえ、レーマンとレミュエルは父親を「幻に耽るひと」と非難し、次のような不平をもらしたのです。「今度も自分たちをエルサレムの地からつれ出し、自分たちの相続の土地も所有の金銀も貴重品もみなあとにのこしてきた。これでは自分たちが荒野の中で死んでしまう……。このたびのことも心に浮んだつまらぬ空想のためにしたのだ……。」（I ニーファイ2：11）エルサレムのユダヤ人のように、レーマンとレミュエルは自分の父親の言葉を拒んだのです。

リーハイとて石で作られた像ではなく、感情を具えた人間でした。したがって、彼にとっても家族の愛や支えは欠かすことのできない大切なものでした。仲間の者には雄々しく対抗した彼も、上のふたりの息子の反逆にはほとんど困り果て胸を痛めたに違いありません。

大変な努力の末に、リーハイは長男の疑惑を鎮め、ニーファイやサムと共に真鍮版を取りにエルサレムに戻るよう説得しました。その息子たちの帰りが遅くなると、今度は彼らを死んだものと思込んだ妻のサライアがリーハイを愚かな老人であると責めたて、不平を言い始めたのです。「あなたは私たちを先祖から受け継いだ土地からつれ出してきたので息子たちは死んでしまった。私たちも荒野で死んでしまう。」（I ニーファイ5：2）

信頼している伴侶が不満や誤解によって離れていってしまうことほど辛いことはありません。リーハイは妻子を愛していましたし、彼らにも自分と同じように神のみこころを知ってほしいと願っていました。彼にとって息子たちの反逆は見るに忍びないものだったでしょう。しかし妻の口から同じような不安や非難の言葉を聞いたリーハイの心はそれ以上に痛んだに違いありません。そのような状況の中では、とかく自分に対して、ひいては神にまで疑いを抱いてしまい、不安などで憂うつになるものです。このような苦痛の中で、リーハイは容易に神に背を向けることもできたはずですが。しかし彼はそのようなことはしませんでした。

むしろ彼は信仰と信頼とをもって主に従ったのです。その後、彼はいわゆる「リーハイの夢」を見、その示現の中でリーハイは子供たちにも自由意志があることを教えられます。そして、子供たちが、父や神に背いて主のみたまを失うことも神を信頼して福音の貴い実を味わうことも自由で、その選択はすべて彼らに任されていることを知るのでした。

しかしそれがわかったところでリーハイの心痛が収まるわけではありませんでした。とはいえ、彼は少なくとも罪悪感からは解放され、神がすべての子供たちの生活に関心を向けてくださる偉大なお方であることは確信できたはずでした。

リーハイの経験から、慈悲深い神のみ手にあっては試しても苦痛も、私たちを昇栄にふさわしく備えてくれる大切な手段になり得ることがわかります。みずからの信仰を試されたジョン・テイラーは、予言者ジョセフ・スミス次の言葉を紹介しています。「神はあなたを試される。あなたを捕えて、まさに心の糸を引きしぼり、もしあなたがそれに耐えられなければ、神の日の光栄の王国を受け継ぐにふさわしくない者と見なされるのである。」（「メルケゼデク神権定員会用個人学習ガイド1981」p.151）

最近では、マービン・J・アシュトン長老が、私たちのなすことすべてに神のみ手が置かれていることを次のように語っています。「憂い、悲しみ、悲観に遭遇しても、『なぜあなたにこの試練が臨んだかわかるか』と神に尋ねられたときに、『私はわかりません。しかし主はご存じです』と答えられるとしたら、何と心が休まることでしょう。

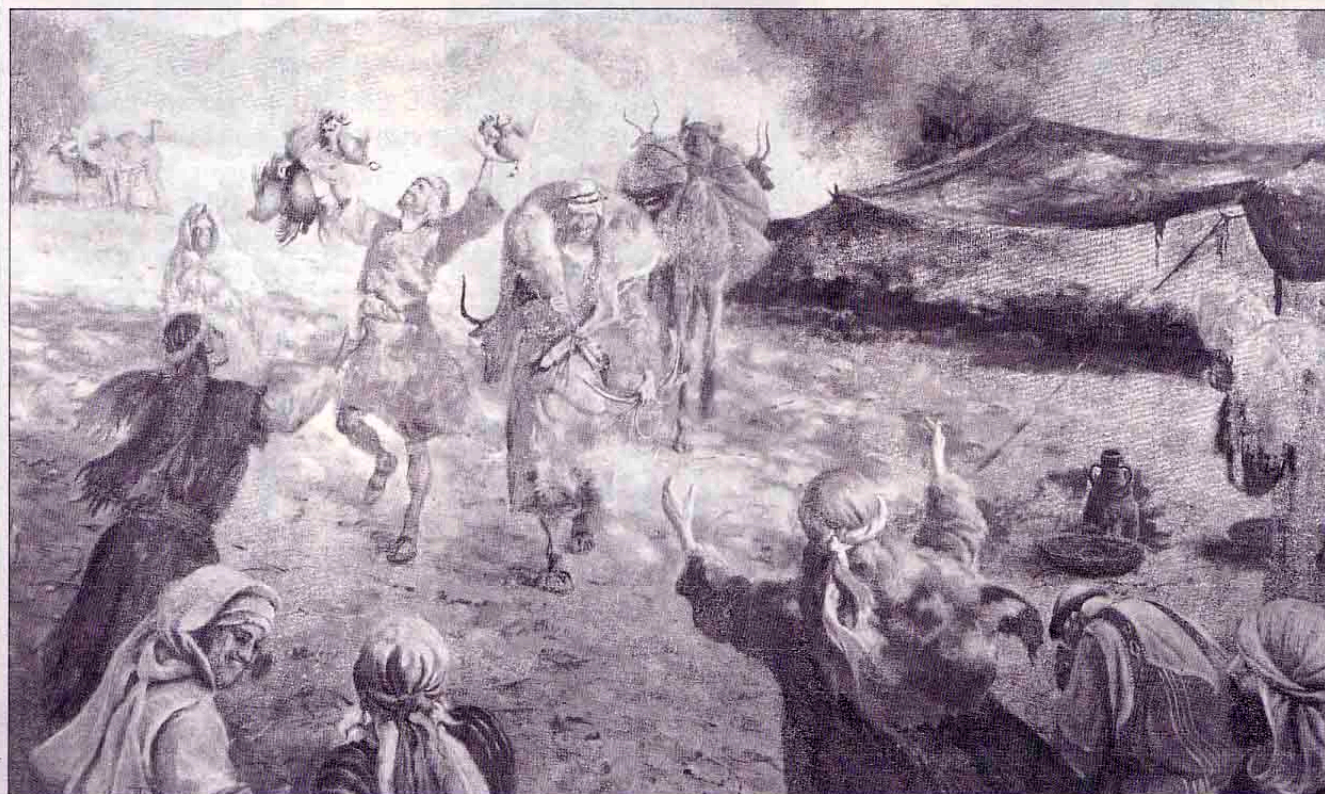
確かに、平安は恐れとは反対のものです。平安は神を信頼する人に与えられる祝福であり、各自の正しい生活によって確立されるものです。」（「聖徒の道」1986年1月号、p.66）

努力し続けたリーハイ

上質の鋼を作るのに加熱と冷却を繰り返すように、神の娘、息子たちにも火の中をくぐり抜け、艱難という水につけられる経験が必要なのです。約束の地を受け継ぐと言われたリーハイの人生は、反対に争いと悲しみ、苦痛の人生でした。

ニーファイが弓を折り、数日間食べ物が無くなってしまったとき、飢えを恐れたレーマンやレミュエル、イシメルの息子たちは彼に腹を立てました。リーハイもこのとき

ニーファイが弓を折り、
数日間食べ物がなくなってしまったとき、
飢えを恐れた家族、そしてリーハイは、
主に不平をもらしてしまいました。
しかし主に咎められたあと、
リーハイは悔い改め、神に感謝を捧げました。



かりは主に不平をもらしてしまいました。不満だらけの子供たち、疲労感、老齡、いつ終わるとも知れないさすらいの旅、飢えへの恐怖が彼の心に重くのしかかってきたためでしょう。

しかし主はリーハイのつぶやきに答えられたのです。聖典には次のようにあります。「主の御声が父（リーハイ）に聞こえて、父が前に主に向かって不平の言葉をもらしたのをきびしくこらしめたもうたので父は悲しみの底に沈んだ。」

（I ニーファイ16：25）主に咎められたあと、リーハイは悔い改め、神に感謝を捧げました。そして信仰を持ち全力を尽くして進んでいきました。

バウンテフルに少しの間とどまってから、リーハイの家族は船に乗って海を渡りました。その船の中でも、リーハイは子供たちの行動に心を痛めなければなりませんでした。レーマン、レミュエルそしてイシメルの息子たちとその妻たちは「心が浮れ」（I ニーファイ18：9）、粗暴になり始めたのです。そして彼らはいさめようとするニーファイを縛りあげました。その後大きな嵐が起こり、船が沈みかけました。

リーハイとサライアは「年もすでにとり、その子供らのために大そう悲しい目に逢ったのでとうとう病の床に倒れた。

まことに……深い憂いと大きな悲しみと、（レーマン、レミュエル）の悪い行いとのために、ほとんどこの世を去ってかれらの神と顔を合わせんばかりとなった。まことに……しらがあたまはまさに低く垂れて塵の墓に、いな悲しくも大海の墓に葬られようとするにさえ至った」のです。（I ニーファイ18：17-18参照）

だれもが「心安らぐ日」を待ち望んでいます。また私たちには主が「最終的に幸福」を約束してくださっているという確信があります。しかしそのような幸福が必ずしもこの世で達成されるとは限らないのです。そうだとしたら私たちに求められることは、試練が終わるのを忍耐強く待つことではないでしょうか。

そうすれば魂が鍛えられ、私たちは神の赦しを経験するようになり、みたまの慰めが受けられるようになります。おもしろいことに、私たちが神から引き離そうとするものが反対に私たちが神に近づけてくれる場合が多いのです。使徒パウロの生涯は迫害と試練の連続でしたが、彼はこう宣言しています。「だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、

危難か、剣か。……

わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。

わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」（ローマ8：35-39）

リーハイもまた平安を見いだしました。荒野での苦しみを経験し、約束の地に着いてから死を迎えるまでのわずかの間に、彼はこう記しています。「主は私を地獄から贖いたもうた。私は主の栄光を見ていつまでもその慈愛の御腕に抱かれている。」（II ニーファイ1：15）

「艱難をした荒野」はそれなりに良い結果をもたらしました。これは良いスタートを切り、その状態を維持していく人々にも約束されています。リーハイの魂は清められました。試練や苦痛に耐えた彼は、主が約束してくださった報いを受けるのにふさわしく備えられたのです。

リーハイと同じように、私の友人もついに彼の「荒野」に別れを告げることができました。子供たちは両親の信頼にこたえて戻り、努めてキリストに倣った生活をしています。ここまで来るには決して楽な道ばかりではありませんでしたが、彼らはそれぞれの苦悩に立派に耐えたのです。

もちろん、常に私たちの思いどおりの結果が得られるとは限りません。事実、リーハイの上のふたりの息子はどうしても父の思いや徳を認めようとはしませんでした。しかしそれも、リーハイやサライア、ニーファイ、ヤコブ、ヨセフが神の愛にあずかる妨げにはなりませんでした。

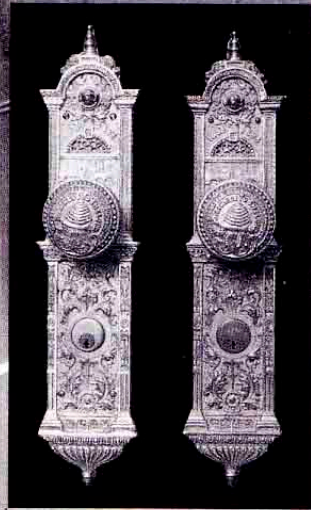
結局、昇栄というものは、私たちが「恐れおののいて自分の救の達成に努め」るときに（ピリピ2：12）個々に与えられるものなのです。

荒野の真ただ中にいる人々にとって、次の言葉は大きな慰めとなることでしょう。

主われにたよるもの
敵の手には渡し得ず
地獄かれに迫るとも
われその霊を見捨てはせず
必ずわれは見捨てず

（『主のみ言葉』賛美歌96番）□

神殿で エンダウメントを 受けるために——家族のための手引き



神殿で行なわれる儀式は、あまりにも神聖なために神殿内でしか話せないことになっています。そのため、教師や友人たちの中にはこれから神殿の儀式を受けようとしている人々に、何をどう話したらよいか迷ってしまう人がいるようです。

参入の準備をしている人々は、まず儀式や神殿での教えを参入したその日にすべて理解することはむずかしいということを知り、信仰をもって神殿での経験に臨むことが大切です。皆さんにとって初めての神殿参入は、絶えず霊を訓練し、啓発し続けてくれる人生の第一歩を踏み出すことにほかなりません。

十二使徒評議員会のジョン・A・ウィットソー長老(1921-1952)は、神殿では「バプテスマ、神権の聖任、結婚、生者と死者のためのこの世から永遠にわたる結び固め、生者と死者のエンダウメント、福音の釈き明かし、導きと教えを施す働きに関する会議など」が行なわれると述べています。

また神殿は「神権にかかわる導き、平和、誓約、祝福、啓示を受ける場所」であり「実に教会の信仰深い会員はみな神殿に行き、その特権を享受するようにすすめられている」とも述べています。(『神殿を仰ぎ見て』「聖徒の道」1968年6月号, p.111)

エンダウメントとは何か

バプテスマのあとに私たちは聖霊の賜を受けます。しかし神殿で受けるエンダウメントはそれ以上のものです。エンダウメントは、清い徳のある生活をし、利己的な思いを捨てて神の王国建設のために同胞に仕えることを御父に約束する私たちと、この世にあっては見守りと祝福を、また永遠にわたっては大きいなる祝福と栄光を約束してくださる御父との一連の契約なのです。

ブリガム・ヤング大管長はこう言っています。「定義を簡潔に申しあげよう。あなたにとってエンダウメントとは、主の宮居においてあなたがこの世を去ったのち、番人として立っている天使たちの前を通り過ぎ……昇栄を得られる



ようにするに必要なすべての儀式を受けることである。」(「ブリガム・ヤング説教集」p.416)

この儀式を通して、ふさわしい聖徒は「高き所」から世の悪に対抗する力を授かります。聖徒はこの中で、地球の創造に関する教えを受け、アダムとイヴの墮落について、また彼らがエデンの園から追放されたことについて学びます。さらに救いの計画や背教、福音の回復などについて教えを受けます。その教え方や神殿内で学ぶ事柄はみな独特のもので、生涯定期的に神殿に入って礼拝し、学び続ける価値のあるものです。

「神殿の儀式は天父の知恵に基づいて計画されたものであり、生活の導き手、守り

手として私たちが神とキリストの住みたもう日の光栄の王国で昇栄にあずかることができるよう、この末日に明らかにしてくださったものである。」(ハロルド・B・リー「実りある生活への決断」p.14)

バプテスマが私たちの救いに欠かせない大切な儀式であるように、エンダウメントも私たちの昇栄に欠かすことができません。エンダウメントは、永遠の結婚の結び固めの儀式に入る前に個人個人が受けなければならない大切なものです。

エンダウメントを受けるにふさわしくなる

福音の儀式にあずかれるかどうかは、私たちがそれにふさわしい生活をしているかどうかということによって決まってくるのです。神殿の儀式の場合は特にそうです。「十分な準備ができず、思いと心がエンダウメントの祝福を受けるにふさわしくない状態のときは、真理の光が輝くばかりに光を放つ主の宮居に入ることをみあわせた方がよい。なぜなら、光は人によっては祝福にも責め苦にもなり得るからである。」(ジョン・K・エドマンズ「神殿の扉を通して」p.77)

神殿に入るにふさわしいかどうかは、以下の標準を守っているかどうかによって判断されます。

道徳的に清い。

予言者を、あらゆる神権の鍵を行使する権能を備えた地上で唯一の人として支持している。

教会の標準に添った生活をしている。

未解決の罪などが無い。

正直である。

活発な会員であり、周囲からよい評価を受けている。

完全に什分の一を取めている。

家族と信頼ある良い関係を築いている。

地元の教会指導者や教会幹部を支持している。

知恵の言葉を守っている。

背教団体などに加入していない。

監督や支部長、またステーキ部長会や伝道部長会の一員との神殿推薦状を受けるための面接で、私たちは以上述べたような標準に従っているかどうかを尋ねられます。神権指導者に自分自身がふさわしいことを証明できた人は、神殿の入り口で提示するための神殿推薦状を受けます。その推薦状に自署することは、神殿参入にふさわしいことを自分で認めることになります。

監督や支部長は、神殿参入にあたってほかに守らなければならない事柄について、皆さんのどんな疑問にも答えてくれるはずです。ではそれをいくつか見てみましょう。

若人は、伝道や結婚に先立って個人のエンダウメントを受けられることができる。

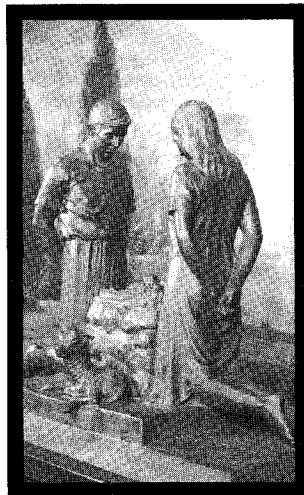
男性はメルケゼデク神権を持っていないなければならない。

分別ある独身女性は、神殿結婚に先立って、あるいは霊的な面で準備ができていると監督が判断した場合に、個人のエンダウメントを受けられることができる。

教会員でない人と結婚している人、またはエンダウメントを受けていない人と結婚している人は、伴侶の同意があれば神殿推薦状を申請することができる。

改宗者は、神殿参入の資格を得るまで1年間待たなければならない。

特別な許可がある場合を除いて、神殿外で結婚した夫婦はエンダウメントや結び固めを受けるまで1年間待たなければならない。



初めての神殿参入にあたって

初めて神殿に入る日に、あわてて参入するようでは何が欠けているとしか言えません。自分自身のエンダウメントはたった一度だけですから、十分に余裕を持って、すべての経験を思い出し素晴らしいものにするのが望ましいと言えます。推薦状や神殿着が整っているかどうか確かめるだけでなく、聖きみたまの導きを受けて、これから経験しようとしていることへの理解を深めるためにも、神殿に早目に着いて、ゆっくり瞑想にふけるだけのゆとりを持つようにすべきです。また初めての参入者にとっては、神殿職員がそばについて何かと手を貸してくれることを知っておくことも心強いことです。

神聖な象徴と神殿での礼拝

歴史を通じ、人々は自分たちの学ぶ真理を一様に象徴を用いて表わしてきました。神殿でのエンダウメントがどれだけ理解できるかは、象徴をどれだけよく理解しているかにかかってきます。象徴は物事を表現する実に端的な手段ですが、神殿で用いられる象徴にどれだけの意味があるかを理解するには長年にわたって神殿で礼拝を続けることが必要になってきます。ただし直接儀式には触れなくとも、神殿で用いられている象徴の性質を吟味することはできません。たとえば、十二使徒評議員会のボイド・K・パッカー長老は「聖き宮居」という本の中で、このように言っています。

「神殿で儀式のために働く時には、白い衣服を着ます。白い服は、汚れのないこと、神殿に入るにふさわしいこと、清いことの象徴です。……

一度神殿の儀式を受けると、それ以後はガーメントと呼ばれる特別な下着を身につけるようになります。……

ガーメントは、神聖な誓約を受けたしるしです。また、ガーメントを着る者に慎みを教え、盾となり守りとなります。

神殿自体ひとつの象徴となっています。夜、全景を照明

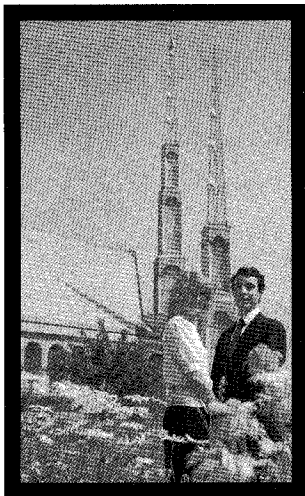
で彩られた神殿を見たことのある方はおわかりでしょうが、何という心打つ光景でしょうか。光を浴びて闇の中にそびえ立つ主の家は、霊の暗やみに沈んでいくこの世に立てられたイエス・キリストの福音の力と靈感の象徴となっています。

神殿を照らすその明かりは別の明かり、すなわち霊的光明の象徴でもあります。……学んでいく過程で、私たちがどれだけ霊的光明を取り入れていけるかは、私たちにどれだけそれを受け入れる態勢ができていくかによるのです。」(ボイド・K・パッカー「聖き宮居」pp.16, 19)

永遠の象徴ということに簡潔に触れてみましたが、これらは主とその僕たちがこれまで王国の奥義と永遠性について語る際に用いてこられた象徴のほんの一部にすぎません。神殿の儀式に象徴されている真理は、皆さんが神殿の中で瞑想し、教わった事柄の永遠性をみたまの力によって知るよう努めるときに一層明らかになるのです。神殿の中で用いられる象徴を理解しようとする姿勢は、神殿における礼拝の初歩であることを心に留めておかなければなりません。私たちが交わす神聖な約束は、日常生活のあらゆる面で守り、従うべきものです。

主の宮居に参入できることは特権です。エンダウメントを受ける必要性を十分に理解するときに、私たちのこの世での生活は目的ある意義深いものとなります。自分自身のエンダウメントを受けた後は、バプテスマや確認、エンダウメント、結び固めなどの永遠の儀式を受けずに亡くなった義人の身代わりとなって何度でも神殿に入ることができます。ほかの人の身代わりとなって喜びを得ることは、すなわち「キリストの満ちみちた徳の高さにまで至る」(エペソ4:13)ことであり、1987年4月の総大会でボイド・K・パッカー長老が言っているように「自分ではできない人々のために、神殿で身代わりの儀式を行なうのは、クリスチャンらしい行為なのではないでしょうか。」

自分自身のエンダウメントのために神殿に入り、その後他の人々の身代わりとなって参入し、生涯霊の学習を続けていくことは、この世に来た私たちの大切な使命であり、



また聖徒を整え、福音を宣べ伝え、死者を贖うという教会の使命のひとつでもあるのです。

神殿について子供たちに教える

神殿に対するあなた自身の態度が、子供たちを神殿参入に備えさせるうえで、すばらしい教材となります。神殿のエンダウメントからもたらされる祝福に深い感謝の念をもって接している親を見ていれば、子供たち自身も生活の中にそうした祝福を待ち望むようになるでしょう。

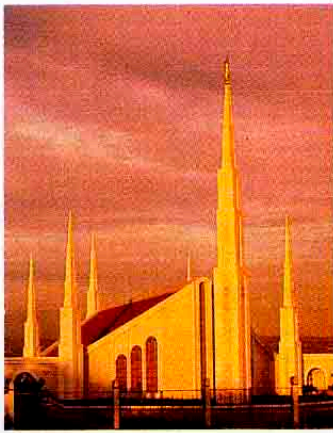
子供たちにはいろいろな方法で神殿の大切さを教えることができます。部屋の壁に神殿の絵や写真をかけておくのもそのひとつです。また家庭の夕べを利用して、神殿で行なわれる儀式について話してあげることもできます。家族の祈りや父親の祝福の中で、靈感を受けて神殿の大切さについて触れることもできるでしょう。神殿参入の標準について話すことにより、(バプテスマの準備をしている子供たちとは特にそうですが)就学前の子供であっても規律ある生活や慎みある服装、永遠の家族などの原則を分かち合うことができます。

このような環境で育っていく子供たちは、神殿に対して大いに敬意を払うようになります。皆さんが定期的に神殿に参入し、そこに霊的強さを見いだす姿を見ている子供たちはなおさらのことです。

家庭の夕べのときや、エンダウメントを受ける準備をしている娘、息子たちと一緒に勉強をするときには、よく祈った後に話し合いをすれば、家庭の中での話はそれで十分です。あとはすべて神殿の中で話すようにするのがよいでしょう。

子供たちに、エンダウメントと定期的に神殿に参入できることの祝福を理解させることによって、皆さんの霊性は高められます。皆さんはエノクの父親のように、彼らに「神の道をことごとく」(モーセ6:21)教えることになるのです。□

●左からフィリピン神殿、
サモア神殿、ニュージ-
ーランド神殿



愛は、いらだたない

(Iコリント13: 4-5)

目的：怒りや争いを避ける。



夫が朝早くから神権指導者会に出かけたために、メアリーはひとりで子供たちを教会に連れていかなければならず、その仕度におおわらわでした。赤ちゃんがむずかり、リベカは自分の靴を片方見つけることができず、4歳のデビッドは着替えたばかりの服の上に食べ物をこぼしてしまうという大変な有様でした。メアリーは、どこから手をつけていいのかかわからず、その日は教会を休みたいとさえ思いました。結局遅れて教会に着きましたが、リベカとデビッドには腹を立てたままで、とても敬虔な気持ちになるどころの話ではありませんでした。

私たちも、このようにいらいらしたり、我慢できないと感じたりすることがあります。しかし、怒りにまかせて、そのような気持ちを表に出してしまうと、みたまを遠ざけてしまうことになります。私たちは、キリストのみもとに行き、自分を全き者にしようと努力するときに、「何が正しいのか？」ではなく、「イエスが自分に望んでおられるのは何か？」と考えなければなりません。

イエスは人々からひどい扱いを受けても、それに耐え(Iニコライ19: 9参照)、自分を十字架につけた人々の赦しを願われました。(ルカ23: 34参照) 私たちはそれほど大きな迫害を受けることはありません。しかし、小さなことで「いらだつ」場合がよくあります。無礼な態度や不従順、また長く待たされたり、人と意見が合わないとき、あるいは落胆したり物事が思うように運ばないときなど、いらだちの原因は様々です。疲れていたり、病気がったり、忙しいときは、特にいらいらしがちです。

そのようなときに、まず初めに感じるのには怒りかもしれません。しかし「容易に怒らず」に(モロナイ7: 45)、愛をもって仕える道を選ぶこともできます。さらに片方のほおを向けて(マタイ5: 38-39参照)、忍耐と親切な心で仕えることもできます。そうです、私たちは努力することによって、怒りや不寛容な思いをしずめることができます。口から言葉を出す前に、深呼吸をして、少し考えてみるとよい場合もあります。「このようなとき、イエスならどうなさるだろうか」と自問するくせをつけておくことと助けになります。祈りと悔い改めも私たちの霊を癒し、心に愛を満たしてくれます。

私たちは争いを避け、怒りをしずめることによって、自分以外の人を悪に染めないようにすることができます。そして、さらにイエスに似た者となれるのです。イエスはご自身を犠牲にすることにより、そのみもとに来て、模範に従うすべての人々が永遠の生命にあずかれるようにしてくださいました。□

訪問教師への提案

1. マタイ18: 15, 21-22を読み、人に傷つけられた場合の対応の仕方に関するイエスの教えについて話し合う。
2. 私たちをいらだたせる原因となるものについて考えてもらう。愛をもってこたえるには、どうしたらよいかについて話し合う。(「家庭の夕べアイデア集」pp.36-40, 54-57, 87, 108-111, 116-19, 149-151, 180, 187-88, 194-95, 251-63, 267-69参照)

豊かな実り

第1回末日聖徒イエス・キリスト教会国際美術コンクール参加作品の紹介



前ページの紹介

「ああ、エルサレム、エルサレム—めんどりとひな」(マタイ23:37) (彫刻)

ロイ・L・スチュアート (アイタホ州レックスバーク在住)

「シヨセフ・スミス」(粘土細工)

リウバ・プロスク (カリフォルニア州バサデナ在住)

「聖書を読む」(木工)

ジョイ・タイ (アイタホ州ボイシ在住)

右下：準優勝作品「事件を

越えて：1844年6月

24日月曜日、午後4

時45分」(油彩画)

ピノ・ドラゴ (ドイ

ツ連邦共和国、フラン

クフルト在住)



上：「海の島々の大なる約束」

(油彩画)

ラウリー・スコペレン (カリフ

ォルニア州アルタ・ロマ在住)

右：「夏の雨」(油彩画)

テオドリコ・P・カマガン・ジ

ュニア (フィリピン、リバシテ

イー在住)



右：「アタムの肋骨」(ブロンズ像)

エリサベス・ロウ・ブラウン

(ユタ州ローガン在住)

右中：「万華鏡」(油彩画)

ヨハン・H・ベンシン (ドイ

ツ連邦共和国在住)

右端：「サラ」(油彩画)

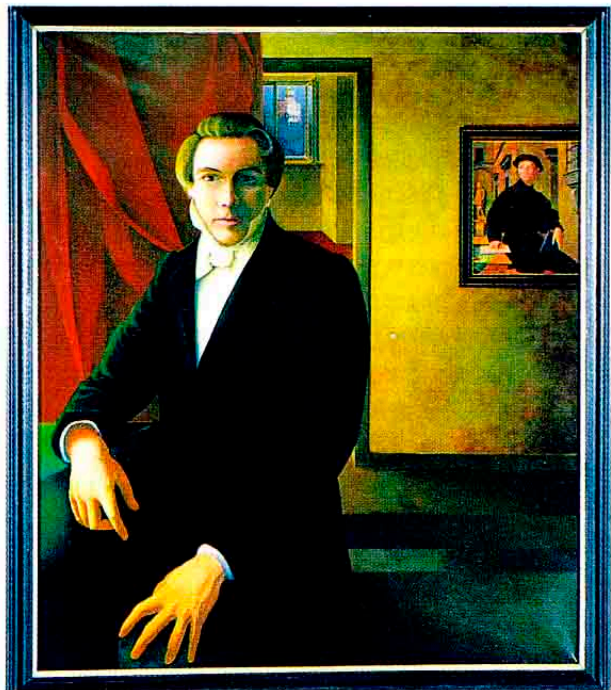
リー・ウテル・ベシニオン (ユ

タ州スプリングシティー在住)





左：優勝作品「リーハイの夢」(油彩画)
スティーブン・L・ニール (オレゴン州ベンドルトン在住)



左：三位入賞作品「見るものが見えず」(油彩画)
シャウナ・グリーンガー(ユタ州ソルトレークシティ在住)
左下：「家並み」(油彩画)
ウォルキリア・フロンズ・ドミアニ(ブラジル、サンパウロ在住)
下：「聖典勉強」(油彩画)
マリオン・ハウス(ユタ州ニュートン在住)



上：「ベナンの聖女」(複合)
ナオミ・ヤング、ラクナ・ニッケル(カリフォルニア州在住)



左上：「ひまわりと乾燥牛糞集め」(油彩画)
キャリー・カップ(ユタ州プロボ在住)
左：「歌うタビデ」
シオハンニ・ゲータ(イタリア、ミラノ在住)

この1年間、ソルトレークシティーにおいて末日聖徒の手による新たな美術品が数多く展示され、人々の注目を集めてきました。170点の絵画、彫刻から成る展示物は、第1回末日聖徒イエス・キリスト教会国際美術コンクールに出品された1,000点以上の作品の中から選ばれたものです。

「私たちは豊かな実りをこの目で堪能することができました。」こう語るのは博物館長のグレン・M・レナード氏です。

「様々な芸術的技法の中に、私たちは回復された福音に対する一貫した証を見ることができます。出品された作品は、聖典や教会の歴史、新しい教会活動などから印象深いイメージをとらえ、それらをもとに制作されたものがほとんどです。」

「どの作品も、様々な芸術的伝統を取り入れながらも共通した信条を見事に表現しています。」レナード兄弟はこう語っています。彼はさらにこう説明しています。

「語りかける言葉が何であろうと、また国によって見せる芸術的伝統がどう異なると、特定の宗教的イメージは末日聖徒に共通のメッセージとして伝わってき

ます。

たとえば、救い主の贖い^{あがな}が米国人画家の直接的なスタイルで描かれようと、ヨーロッパの画家たちの抽象的なスタイルで描かれようと、あるいはまた素人のラテンアメリカ人による大胆な色彩によって描かれようと、その絵の表わすものは確実に伝わってくるのです。」

「こうしたコンクールを通して、末日聖徒の芸術家たちは大いに鼓舞され、作品を通じてお互いに信仰を分かち合っています。」こう語るのは七十人第一定員会会長会のひとり、教会歴史部長のティーン・L・ラーセン長老です。彼はこうつ

け加えています。「こうした展示物を通して、私たちは彼らのすばらしい貢献ぶりを知ることができます。彼らが今後も宗教作品を通して人々に靈感を与え続けてくれるよう願っています。」

ラーセン長老は、公式に開かれたその展示会で、受賞者に賞金を授与しています。ある匿名の献金者による多額の寄付により、4万ドル以上もの賞金を手渡されました。

1位はオレゴン州ペンドルトン在住の独学の画家スティーブン・L・ニール兄弟の作品「リーハイの夢」、2位はドイツ連邦共和国フランクフルト在住の画家ピノ・ドラゴ兄弟の作品で予言者の殉教までの決定的瞬間を描いた「事件を越えて：1844年6月24日月曜日、午前4時45分」、3位はユタ州ソルトレークシティー在住のシャウナ・クリンガー姉妹の二元的画法による作品「見る者は見えず」の各作品が受賞しました。

ほかにそれぞれの功績を称えた6つの賞が授与され、博物館のコレクション用に買い取られた作品もいくつかあります。

ここに紹介されているのは、展示された作品の一部です。

左：「アンドレ」（ブロンズ像）

ジェイムス・R・アバティ

（ユタ州ソルトレークシティー在住）

中央：入賞作品「崇敬」（ブロンズ像）

ローラ・リー・ステイ

（ユタ州プロボ在住）

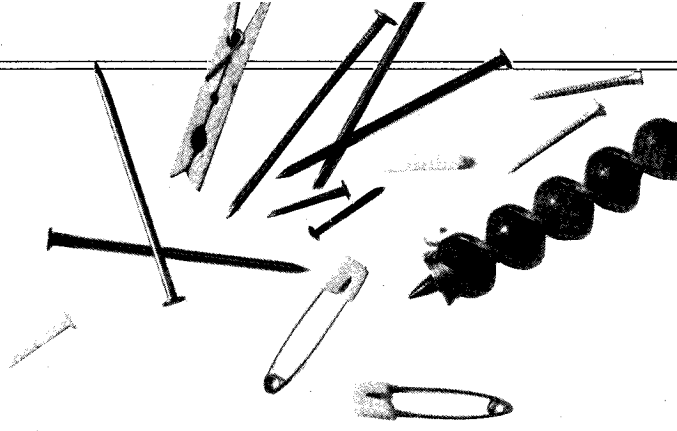
右：「静まれ、黙れ」（マルコ4：39）

（ブロンズ像）

マーク・ホプキンス（ジョージア州

エマーソン在住）





訪問教師より 愛をこめて

メリンダ・サットナー

4年ほど前、夫のデビッドと私はテネシー州クラークスビルに古い家を購入しました。その後私たちは内装をすべて変え、床の一部に穴を開け電気配線や配管をしながら、部屋数を増やすことにしたのです。実に大変な仕事で、私たちはほとんどの時間、家に縛られることになりました。

まるで建築現場で生活しているかのようでした。夜になってベッドに入るときも、ベッドカバーの上のおがくずや木片、その他たくさんのおがくずをかき集めなければ寝られないほどでした。また床の掃除もほうきでは足りず、大きなシャベルを使う有様でした。居間には木材やベニヤ板が積み、どの部屋にもペンキの缶や釘の入った箱、はしごなど、様々な道具が散らばっていました。

改築中に、私のお腹にはふたり目の子供がいました。子供が生まれる2週間前に、私たちはどうにか床と新しい部屋の塗装を終えました。そ

の晩、産気づいた私は、まだ暖房もなく、玄関に近い部屋には窓もなく、赤ちゃんの部屋もない家をそのままに、

病院に駆け込んだのです。

その日の午後、90キロほど離れた田舎から私の両親が車でやってきました。私は母が来ることを少し恐れていました。というのは、1976年に私が教会に入って以来、母と私はあまりしっくりいっていませんでした。しかし母は赤ちゃんのことや改築中の家のことを思い、助けがいるだろうと思ってやってきたのでした。

家に戻る前に私たちの建築現場に立ち寄った母は、その光景に驚き、生まれてくる孫を迎える状況に啞然としました。母は私が退院してくる翌日の午後までに、家をきれいにしようとしていました。

母は仕事着を着て、シャベルや熊手、バケツを手に予定どおりやってきました。ところが驚いたことに、その建築現場にはごみひとつ落ちていなかったのです。ベニヤ板も木材もペンキも大工道具も何もかも一部屋にきちんと整理されていました。そしてベッドにはきれいなシーツが敷かれていました。また真新しいカバーに包まれたマットの入ったゆりかごが赤ちゃんを待ち受けていました。汚れた洗濯物も消えていました。デビッドのための昼食が冷蔵庫にあり、玄関には赤ちゃんの産着の入った包みとおむつの入った大きな袋が置いてありました。そ



してそこにはカードがついていたのです。「おめでとう！
あなたの訪問教師キャロルとバーバラより愛をこめて。」

私はこのふたりの姉妹のことをほとんど知りませんでした。彼女たちはほんの1カ月前に私の訪問教師に召されたばかりだったのです。翌日、私が病院から家に戻って来ると、キャロルは洗濯物をきれいに仕上げ、届けてくれました。またバーバラは夕食を持ってきてくれました。

しかしこれだけではありません。ほかにもっとすばらし

いことが起こったのです。

実は、私の母は私が伝道に出るまで、何年間か宣教師のレッスンを受けていました。さらに四大標準聖典と「予言者ジョセフ・スミス^の教え」も読破していました。彼女の心は、福音の実践を目の当たりにして、やっと和らぎ始めたのです。

母と私はその週も終わり近くになって、長い時間話し合うことができました。そして何年かぶりにしっかりと抱き合ったのです。母と夜通し話しながら、私は涙を抑えることができませんでした。私たちは再び母として娘としての親近感を味わったのです。

3人の娘たちと共に、夫と私は現在母の所から3,000キロも離れた合衆国の西部に住んでいますが、母からの手紙や電話をいつも楽しみにしています。私の人生にそのような大きな祝福の機会を与えてくださった訪問教師のキャロルとバーバラに心から感謝しています。彼女たちは家の掃除と食事の用意をしに来てくれました。しかしそれだけに^{いっ}どまらず、私たちの思いを変えさせ、傷を癒し、家族の絆を取り戻させてくれたのです。このことを彼女たちは知るよしもありません。□



「己が言葉にて」

サンドラ・ウィリアムズ

翻訳の仕事は、福音の教えをあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる世の人々に分かち合ううえで、重要な役割を果たしています。

19 87年6月も終わりに近づいたある日の、涼しい夕方のこと、高らかな歌声がカリフォルニア州にあるオークランド神殿の前から響いていました。もしあなたがそこに居合わせたなら、歌の美しさはわかったとしても、そ



の耳慣れない言葉にとまどったことでしょう。その歌はこんな感じのものでした。「ソー・ベイ・ツブ・コム・ペブ・ロブ・シブ・ポム・デュア。」これはフモン語で歌われた『神よ、また逢うまで』なのです。フモン語は東南アジアのラオスの数多くの山岳民族の間で使われている言語です。またそれは、たった今神殿で家族の結び固めを受けてきたクア・ロとそのふたりの兄弟イア・ロおよびジョン・リー・ロの母語でもあります。この日はその3人にとって生涯最良の日ともなりました。

ロ家族の改宗も、そしてその歌声も、「あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる世の人々」(教義と聖約133:37)に福音の教えを広めようとする教会の努力のひとつの表われであり、また奇跡的な物語のひとつでもあります。

ロ家族が初めて教会に出席したのは、ソルトレークシティのあるワード部でした。そこでステーク部伝道部長のスコット・ジェンキンスに会ったのです。ジェンキンス兄弟は、タイ語のできる帰還宣教師ブライアン・ウォーカーの助けを受けながら、ロ家族を教え始めました。ウォーカー兄弟が福音の教えをタイ語で伝えると、それをクア・ロがフモン語に通訳して、家族や友人に伝えるのです。

なかなか話がうまく伝わらないこともありましたが、それでもロ家族は喜んで福音の教えを受け入れ、教会に出席し、やがてフモン語支部の中核となりました。その結果、教会翻訳部は聖餐の祈り、「福音の原則」の抜粋、そして賛美歌を数曲、フモン語で出版できるようになり、支部の会員は全集会を自分たちの言葉で聞くことができるようになったのです。それからしばらくして、「福音の原則」と「モルモン経物語」の全訳版も手に入るようになりました。ロ家族のバプテスマに続き、クア・ロがソルトレークシティで初めてのアジア支部の支部長に召されました。ロ兄弟は現在ではカリフォルニア州のベイカーズフィールドに住んでいますが、そこでもアジア支部の支部長として働いています。どんなときでも福音の教えを仲間に伝えるロ兄弟は、これまで少なくとも90人の人をバプテスマに導いています。

ロ兄弟は、自分の改宗にあたっては聖霊の導きがあったと証しています。それは言葉の障害を乗り越えて感じられた影響力でした。しかし、フモン語に翻訳された福音の教材がなかったなら、ロ家族は神殿の祝福を受けるまでもっと待たなければならなかったかもしれません。いや、それどころか受けることすらできなかったかもしれないのです。

いつの日か「あらゆる人々は己が国語と己が言葉にて完全なる福音を聞かん」(教義と聖約90:11)という主の約束の成就に備えるために、大管長会と十二使徒定員会は1965年に教会翻訳部設立の指示を出しました。この部門で働く職員は、ソルトレークシティの教会本部で働いている人も、世界中に散在する地域のオフィスで働いている人も皆、福音の祝福をできるだけ多くの人々にもたらそうと、熱心に働いています。そのおかげで、現在までにモルモン経を

初めとして、教会の教材や月刊誌がおよそ150の言語で出版されるまでになりました。

教会幹部がこの部門の設立の指示を出した時期は、コンピュータを初めとする現代の科学技術のおかげで、翻訳が以前に比べて容易に、また速やかにできるようになった時期と符合します。特別な記号や文字を使う言語でも翻訳をするうえで生じる様々な問題が克服されつつあるのです。

しかしコンピュータには靈感というものがありません。そこで主はそのみ業のために数多くの翻訳者を備えてくださいました。例をあげてみましょう。1980年に翻訳部のある主任に教会の教材をベンガル語に翻訳するという責任が与えられました。ベンガル語というのは、インドやバングラデシュで使われている一言語です。しかし、当時そのベンガル語のわかる教会員がおらず、結局、教会外のふたりの教師に助けを求めました。その翻訳が仕上がったとき、主任は、教義面でも文法面でも正確を要するために、その原稿に目を通してくれる教会員を探し出したいと思いました。

するとまるでその願いに答えるかのように、タウヒダル・アラムという人物について書いた記事が目にとまりました。バングラデシュから来て最近改宗したばかりの人物が、ブリガム・ヤング大学ハワイ校に在籍していたのです。このアラム兄弟の助けを受けて、ベンガル語版の「モルモン経抜粋」がインドのニューデリーで出版されたのは、1985年のことでした。

時に応じて主は様々な方法で働かれます。ガーナのサンブソン・ディビス姉妹が、モルモン経を自分の母語であるファンテ語に翻訳しようという靈感を受けたのは、翻訳部がその仕事を依頼するはるか以前のことでした。ディビス姉妹は子供のころからよくキリスト教徒の人たちと親しんでいました。まだ若かったディビス姉妹は、キリストの犠牲に強く心を動かされて感謝の気持ちを抱くようになり、キリストのために何かしたいと切に願うようになったのです。それから40年近くたち、オランダで英語の勉強を終え、ガーナへ戻ったディビス姉妹は教会に入りました。子供のころの願いを実現する機会が訪れたのです。

ある晩、聖餐会に出席したあとのことです。サンブソン・ディビス姉妹は、集会に集まった人の中に賛美歌を歌わない人がいることに気づきました。英語がわからなかったのです。自分の仲間のために福音を教える資料を翻訳しなければならないと強く感じたディビス姉妹は、その夜『わたしは神の子』を翻訳しました。その後、ほかの賛美歌も翻訳しました。

こうした小さなものを少しずつ翻訳して力をつけていったサンブソン・ディビス姉妹は、長年にわたって準備してきた大事業に取りかかる時がきたと強く感じました。こうしてモルモン経をファンテ語に翻訳したのです。教会の翻訳部でサンブソン・ディビス姉妹の翻訳したモルモン経に目を通したとき、この学校教師の仕事はまさに目を見張るものでした。専門的な翻訳の経験が皆無に近かったという

のに、できてきたものは非常に誤りの少ない、極めて優れたものだったからです。

サンブソン・ディビス姉妹の例は、主が翻訳部のためにどれほど優れた、また献身的な翻訳者を備えてくださっているかを示すひとつの例に過ぎません。このところ翻訳部では、教義に関する教材を世界中の国々で、少なくともその国の使用人口の一番多い言語に翻訳するという活動に携わっています。1986年に大管長会の承認を受け、「全世界プログラム」と名づけられたこの事業が進んでいけば、ここ数年のうちにこれまで以上に多くの言語で教会の教材が出版されることになるでしょう。

このプログラムの「全世界」という名称は、1978年にスペンサー・W・キンボール大管長が行なった説教の中からとられています。大管長は次のように言われました。

「全世界のあらゆる国々でささやかでも始めることができれば、まもなくあらゆる血族、国語の民のあいだで改宗者の数は増え、彼らはその民の光となることでしょう。そして主の降臨に先立って、あらゆる国々に福音が宣べ伝えられることでしょう。」（「地区代表セミナー」1987年10月）

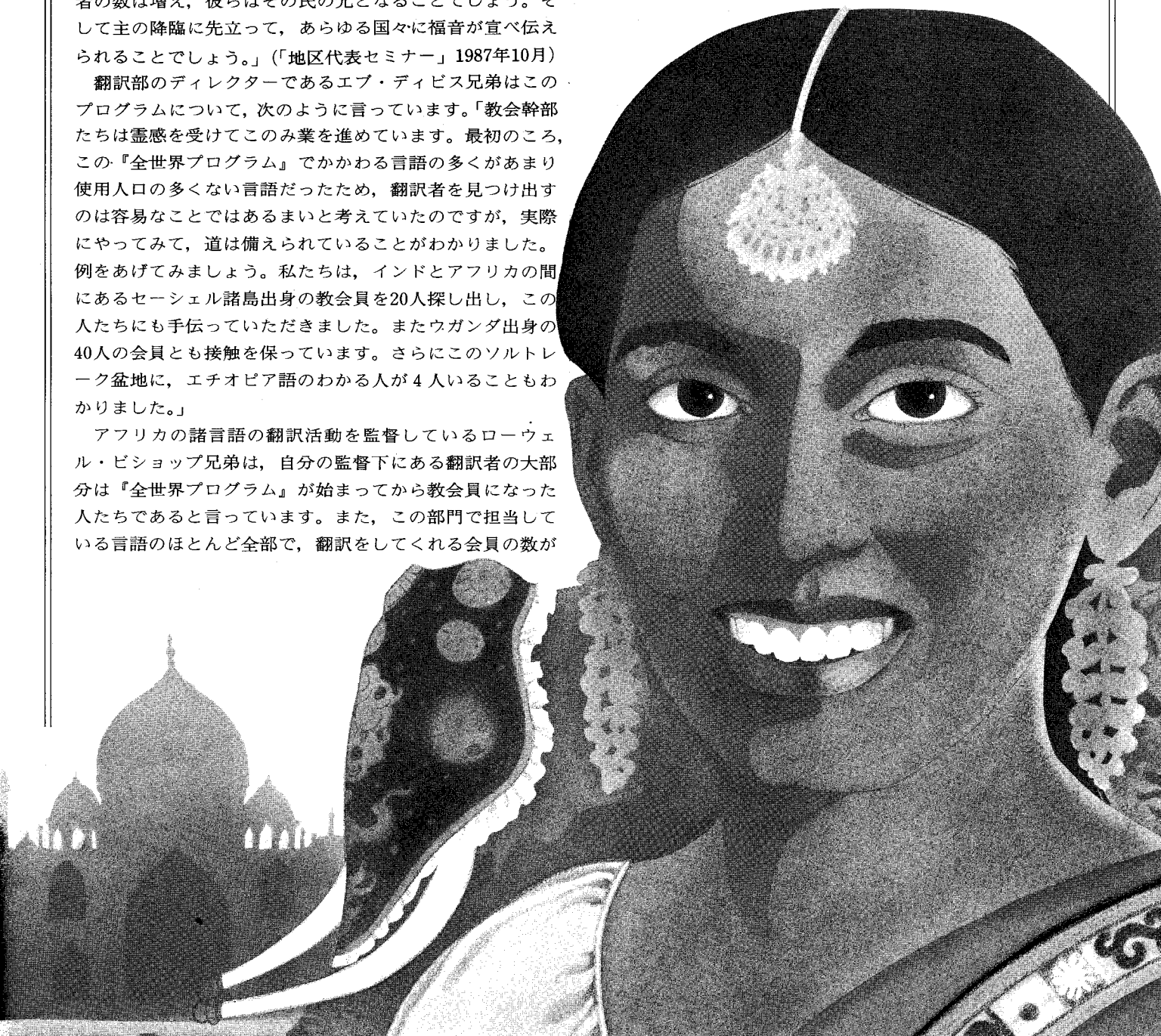
翻訳部のディレクターであるエブ・ディビス兄弟はこのプログラムについて、次のように言っています。「教会幹部たちは靈感を受けてこのみ業を進めています。最初のころ、この『全世界プログラム』でかかわる言語の多くがあまり使用人口の多くない言語だったため、翻訳者を見つけ出すのは容易なことではあるまいと考えていたのですが、実際にやってみて、道は備えられていることがわかりました。例をあげてみましょう。私たちは、インドとアフリカの間にあるセーシェル諸島出身の教会員を20人探し出し、この人たちにも手伝っていただきました。またウガンダ出身の40人の会員とも接触を保っています。さらにこのソルトレーク盆地に、エチオピア語のわかる人が4人いることもわかりました。」

アフリカの諸言語の翻訳活動を監督しているローウェル・ビショップ兄弟は、自分の監督下にある翻訳者の大部分は『全世界プログラム』が始まってから教会員になった人たちであると言っています。また、この部門で担当している言語のほとんど全部で、翻訳してくれる会員の数が

実際に「増え」ているとのことでした。

そのひとつの例としてビショップ兄弟があげているのが、翻訳部で見つけてきた教会員のことで、このときは、ザイールで使われているリンガラ語とツシルバ語というふたつの言語に教材を翻訳するための人材を必要としていました。アルフォンス・ムアンダとマグイ・ムアンダのふたりは、自分の会社の経営にも忙しく、またステーキ部宣教師としても熱心に働いていますが、それでもまだ時間を見つけては、教会の教材をリンガラ語に翻訳するという仕事を立派に果たしています。

ツシルバ語は、アンブローズ・マッサラとルイス・マッサラにとって母語です。しかし、ふたりは大学時代はザイールの中でもスワヒリ語の使われる地域に住んでいたため、そのスワヒリ語が日常語になっていました。ところが、結婚直後にアンブローズがまた以前のようにツシルバ語を使うようにしたらどうだろうかと持ち掛けてきたのです。ル





イスは、妙なことを言うものだと思います。そのときまで数年間、スワヒリ語ばかり話していたからです。それでも、ふたりは再びツシルバ語を使い始め、子供たちも家庭ではツシルバ語で育ちました。教会の教材をツシルバ語に翻訳してもらえないだろうかという問い合わせを受けたとき、驚いたことは言うまでもありません。その驚きについて、ルイスは、なぜアンブローズが、ほとんど忘れかけていた言葉をまた使おうと言い出したのか、ようやくわかりましたと言っています。

しかし、教会翻訳部で仕事を進めている言語がツシルバ語であれ、フモン語であれ、あるいはまたそのほかの多くの言語であれ、その教えて末日聖徒一人一人の日常生活が変わっていかねばなりません。クア・ロ兄弟のように、ひとたび福音を受け入れたなら、私たちは家族にも隣人にも友人にもそれを分かち合う必要があります。そうすれば、私たちは皆そろって、福音という永遠の言語を語り合えるようになるのです。

福音の教えを分かち合うことがどれほど重要かということについては、エズラ・タフト・ベンソン大管長がこれまでたびたび強調しておられます。ある大会で、大管長は次のように言われました。「私たちは、イエス・キリストの福音をあらゆる国民に宣べ伝えるように求められています。……すべての民族、血族、国語の民、国民に福音を伝えるというこの使命は、救い主の地上への来臨が近いことを信じる者に知らせるしるしです。」(『福音を全世界に宣べ伝える使命』「聖徒の道」1984年7月号、p.80) □

ジェイミー

サンドラ・C・プリンリー
(聞き書き：デビッド・プリンリー)

私 は今でもジェイミーの存在に初めて気づいたときのことを、よく覚えています。長い黒髪を編んだおさげが、小さな頭の後ろにかわいらしく下がっていました。初等協会副会長のジョー

ンス姉妹が席まで案内したとき、彼女の栗色に輝く大きくてやさしそうな瞳は恥ずかしそうに室内を見回していました。その日は私が新しく集い始めたワード部で、初等協会の教師として働く最初の日でした。始まったばかりの結婚生活、新しい友人、新しい召し。そうしたことで頭がいっぱいだった私にも、ジェイミーは何か気になる存在だったのです。

各クラスに分級してからは、私は勇者Aのクラスのレッスンに集中して、しばらくの間ジェイミーとの出会いのことは忘れていました。レッスンが始まって5分ほどしたころでしょうか。ドアを静かにノックする音とともに、ジョーンズ姉妹に連れられて部屋に入って来たジェイミーは、丸く輪を作って座っていた仲間の中に入りました。かわいらしい顔はうつむいたままです。時折目を上げる表情からは、ほお骨のでっぱりと端正な顔だちがうかがえます。いかにも無邪気で聡明そうな顔だちなのに、床のタイルに目を落とすたびに、その表情が見えなくなってしまうのです。時間がたつにつれ、ジェイミーも少しずつ活動に参加してきました。勉強中の予言者について質問すれば、笑顔でそれに答えてくれます。こうして、レッスンの間、ジェイミーは完全に集中して話を聞いてくれました。じっと腕を組んだままで、口を開くときは、私が「話し合いに参加して」と頼んだときだけでした。

ほかの子供たちは聖餐会せいさんかいに出席するために部屋を出て行きます。私が黒板を拭いて振り返ると、まだそこに、まるで私が黒板を拭き終えるのを待っているかのように、ジェイミーがじっと座っているではありませんか。

「聖餐会に行かないの？」と言いながら、私はジェイミーの隣の小さないすに腰かけました。

ジェイミーはきちんとアイロンをかけた洋服のひだを直すと、ゆっくりと私の方を見上げます。

「行きます。一緒に行ってもいいですか。」まるで語りつくような声です。そんなことを言ったら私の気にさわるのでは、と心配でもしているのでしょうか。

「もちろん、いいわよ。一緒に行って、お父さんやお母さんを捜してあげるわ。でも、急がなくっちゃね。もうすぐ聖餐会せいさんかいは始まるわ。」

「お母さんは教会に来ていないんです。」

「じゃあ、おばあちゃんが一緒なのかな。おばあちゃんはどこ。」

ひだを直していた小さな手の動きを止めると、その手をひざにそろえます。

「だれも一緒じゃないんです。ひとりで来たんです。」

「ひとりで？ じゃあ、お友達とか親戚の人が連れて来てくれたのね。」

ジェイミーはただ首を横に振っています。そして、行きましようと言わんばかりに私の手を握ってきました。「隣に

座ってもいいですか。」

私は、熱心に頼むかわいらしい顔に向かって微笑むと、「もちろんよ。どうぞ」と言いました。

ジェイミーも微笑み返してきました。愛に満ちた穏やかな表情です。小さな子供だけが無意識に出せる表情なのでしょう。ジェイミーは私の手を引っ張って、礼拝堂の方へ歩いて行きました。

集会后、日曜学校の会長が私のところへやって来ました。ジェイミーは私の主人のデビッドと話をしています。

「もうジェイミーに会ったようだね。あの子があなたのクラスに入るようになって良かったよ。」

私は彼を引き寄せて尋ねました。「ジェイミーの話だと、あの子はひとりで教会へ来ているそうじゃない。ここまでどうやって来るの。監督会のだれかが迎えに行ってるの。」彼は首を振ると、困惑した表情で苦笑いをしました。「いや。あの子は毎週日曜日になると、教会の玄関のところを姿を見せるのさ。集会が始まるのを待っているんだよ。日曜日になると必ずだよ。」

そう言うと彼はほかの集会に出席するために出て行きました。私はいすに腰かけて、ジェイミーと主人が話をしている様子を眺めていました。こんなたいげな子供がそれほどまでに熱心に教会に出席するなんて、どうしてそんな気持ちができるのだろうか。9歳の子供があれほど霊的に成熟するなんてことが、あるのだろうか。私はこの不思議な女の子のことをもう少し調べてみることにしました。

仕事やホームメイキングの活動で忙しく、その1週間はあるという間に過ぎていきました。また日曜日になり、私の生徒たちも初等協会にやって来ました。クラスが始まって5分くらいたったころだったのでしょうか。ジェイミーが少し息を弾ませながら、後ろの席に飛び込んで来ました。クラスが終わると、ジェイミーはいつものように私のところへ話しに来ます。まじめくさったジェイミーの顔を見て、私は少しからかってみたくになりました。

「生れて初めて教会に遅れて来たんじゃない。まるでずっと走って来たみたいだったわ。」

するとジェイミーは私をじっと見つめ、私の言葉をそのままに受け取って、こう言ったのです。「遅れてしまっておめんなさい。きのうの夜、友達が泊まっていけないって誘ってくれたんです。それに今日が日曜日だってこと、忘れていました。夜遅くなってから思い出したんです。それで家まで走って帰りました。でも、眠り過ぎちゃったみたい。」

私は息を飲みました。「そのお友達のうちからあなたひとりで家に帰ったってこと？」

ジェイミーはゆっくりとうなずきました。告白でもしているような気持ちだったのでしょうか。からかうつもりでいた私の心は、すぐに愛と賞賛の気持ちに変わりました。そして私はもう一度、このジェイミーを取り巻く環境につい

て調べてみようという気になったのです。

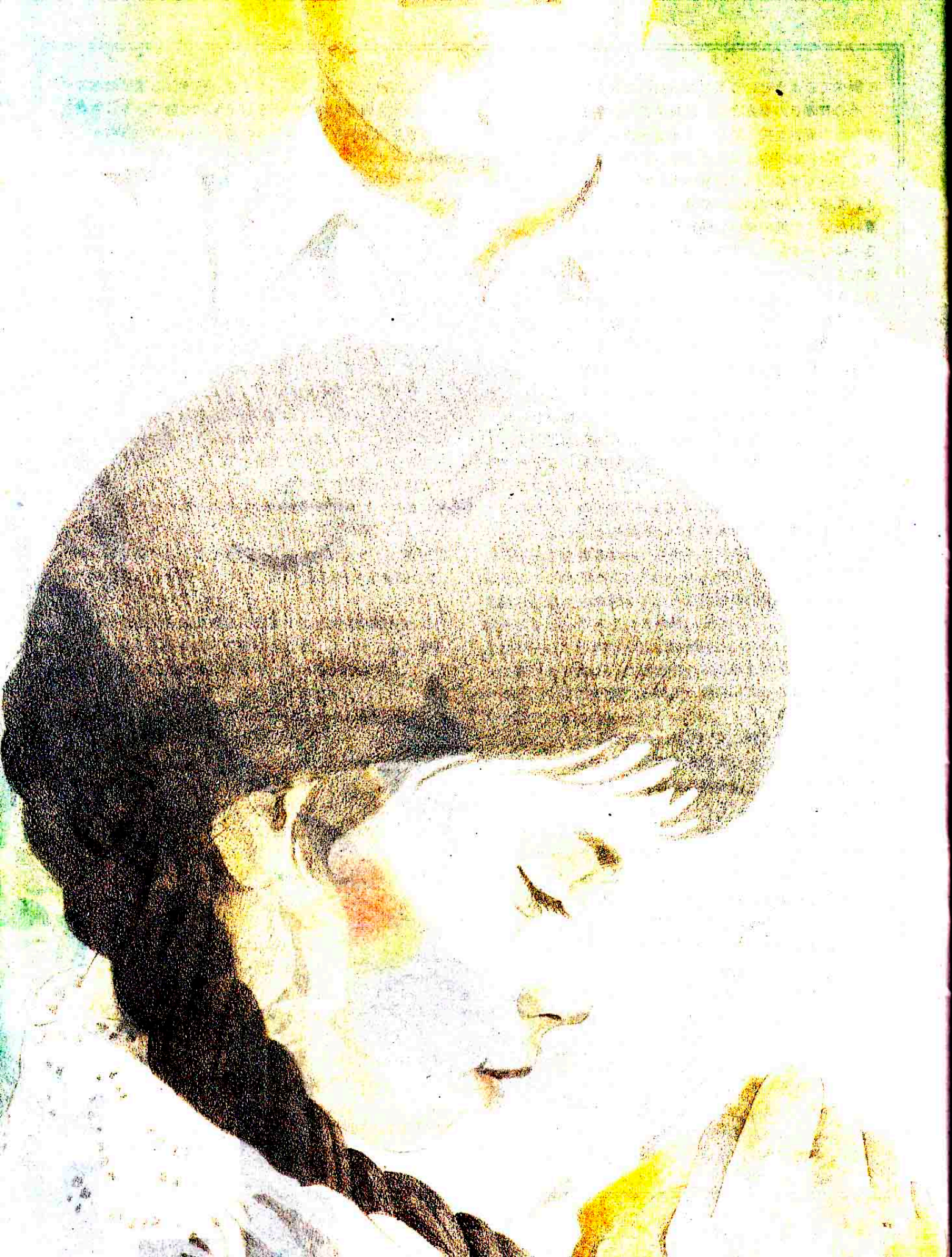
その日曜日の夕方遅く、私はクラスの準備のための資料を持って、ジェイミーの家を訪ねました。ドアのところまで歩いて行って、ノックをすると、ドアが勢いよく開けられます。すると、薄暗い表の部屋いっばいに漂う、濃いたばこの煙の臭いに襲われて、私は倒れそうになりました。それに加えてビールの悪臭です。ひどく涙腺が刺激されます。戸口に出てきたのは、色あせたズボンをはき、シャツを着た大柄でがっしりした体格の男の人でした。顔は大きく、ひげもそっていません。その顔が私を冷たく見えています。まず、私の初等協会の資料をのぞき、それから私の目をじっと見えています。男の目は赤く充血していて、まばたきもせずに私の方を見つめています。私はどもりながら、ようやく口を開きました。

「あのう、ジェイミーはいますか。クラスの資料を少し持って来たんですが。」私はちょっと頭を働かせて、何のクラスか言うのはあまり得策ではなかろうと考えました。ところが驚いたことに、男の表情がなんとなく穏やかになったのです。どうやら、私がセールスマンのような者ではないと判断したようです。中に入るよう手招きをしてくれたので、私は外の空気を胸いっばいに吸ってから、家の中に入っていきました。

煙が天井まで充満しています。息をすると、むせかえりそうになります。その煙の奥には、古い茶色のソファとそれに似合いのいすが置かれてありました。そのいすに座り、ビールびんの山に囲まれて、テーブルでトランプに興じているのが、ほかに男ふたりと、女ひとり。厚いカーテンの引かれた部屋には、外の光も差し込まず、照明と言え、天井からぶら下がっている電球1個だけでした。

その女が顔を上げて、私の方を見ると、不





思議そうな表情をしました。その女の髪の毛はジェイミーの髪より明るい色をしていましたが、厚化粧をしていても、その顔立ちはジェイミーによく似ているのがわかりました。ふたりの男は、戸口まで出て来てくれた男と大差のないものを着ていて、まるで私の存在など無視するかのようになり、ゲームを続けています。私はその女に同じ質問をしました。「あのう、ジェイミーはいますか。クラスの資料を少し持って来たんですが。」

女はゆっくりとうなずくと、重そうな足取りで部屋から出て行き、しばらくすると戻ってきました。

「あの子にはここにはいないよ。たぶん、友達とどこかで遊んでいるんじゃないかねえ。」

「わかりました。じゃ、この資料をジェイミーに渡していただけますか。きょうのクラスの勉強に関連した資料です。」

女は絵と本を受け取ると、それをいすの上に置きました。戸口のそばに立っていた男が私のためにドアを開けてくれました。私はまばゆい陽光とかぐわしい秋の空気の中へ戻って行きました。

歩きながら、私は今自分が訪ねてきたばかりの家のことで頭がいっぱいでした。あのようないたいけな女の子が、どうやってあれほどまでに霊的に成熟し、献身的になることができるのでしょうか。あの部屋の暗さと対照的にジェイミーから輝き出る光のことを何度も何度も考えました。

なぜジェイミーは教会に出席し続けることができるのでしょうか。教室の外で、あの子はどうやって福音のことを学んでいったらよいのでしょうか。これから先何年も努力し続けたいという気持ちを持たせていくには、どうしたらよいのでしょうか。そのとき、ふと心の中にひとつの聖句が浮かんできました。「すべての人々はみな善悪の区別を弁えるためにキリストの『みたま』を授かる。」(モロナイ7:16)

その言葉は私の心の中に響きわたりました。「すべての人々」です。大人にも子供にも、小さな女の子にも、どこに住んでいようとも、それは授けられるのです。ジェイミーの中ではその光がどれほど明るく輝いていたことでしょう。しかも、ジェイミーを取り巻く暗やみのために、その輝きが一層際立っていたのです。私は、ジェイミーの小さな光がその輝きを失うことなく、やがて成長してひとり立ちできるようになるまで、手助けしていこうと決意しました。

そのときから毎週教会の集会が終わると、ジェイミーは我が家へやってきては、ゲームをしたり、食事をしたり、話をしたりして、しばらく過ごすようになりました。時の経過とともに、私たちはジェイミーの心の強さをますます実感していったのです。ジェイミーには平安と穏やかさが備わっており、それによって彼女の周りにはひと

り残らず影響を受けたのでした。

やがてある日のこと、一緒に家まで歩いていたとき、ジェイミーの口から思いがけない言葉が飛び出しました。

「先生、わたしバプテスマを受けたいの。わたしはもう9歳でしょう。だからもうバプテスマを受ける時期になったと思うんだけど、だれに頼んだらいいのかわからないの。」

あの大きな目で一心に見つめられた私は、ジェイミーを心の底から愛する思いで胸がいっぱいになりました。私はジェイミーをしっかり抱きしめると、ふたりで手をつないだまま、スキップしながら帰りました。

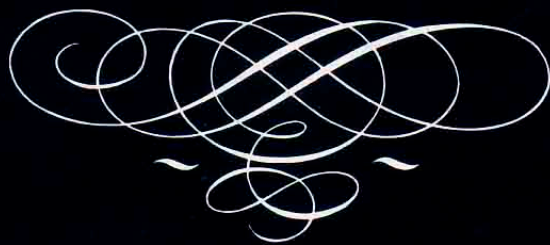
ジェイミーはそれから数カ月後、この地域に派遣されたひとりの宣教師の手によってバプテスマを受けることになりました。その宣教師は同僚とふたりで、バプテスマに必要なレッスンをジェイミーに教え、ジェイミーの母親も娘のバプテスマに同意してくれたのです。主人と私は、4列目に座りました。ジェイミーの母親と妹のすぐ後ろです。母親はいつもどこか違った表情をしています。初めてあの家を見たときに比べ、なんとなくうれしそうです。最初礼拝堂に入ったときは、ちょっと落ち着かない様子でした。しかし、集会の雰囲気気が気持ちを楽にさせたようです。ジェイミーが白い服を着て出て来たとき、私は愛と驚きの気持ちでいっぱいでした。その姿はいかにもしみも汚れもない美しさです。通路を歩いて来て、私たちの脇を通り過ぎるとき、にこっと微笑んで行きました。9歳の少女の幸福な笑顔は、神の娘の美しさそのものでした。

宣教師たちが信仰と従順について話をしている間、話に耳を傾けながら、私はジェイミーをじっと見ていました。そして長老たちの話す言葉はみたまによって教えられていることがわかったのです。いよいよフォントへ行く時間です。ジェイミーは水の中へ入るときも全然ためらいませんでした。私の胸は高鳴り、キリストのみ言葉が私の心に浮かんできました。「幼な子らをわたしのところに来るままにしておきなさい。」(ルカ18:16) そのみ言葉が、そのとおりの行ないをする小さな子を見て、私の中に新鮮な意味で迫ってきたのです。そして確認の儀式です。家族のうえに祝福があって、教会員となったジェイミーを支え励ましてくれるように、と天父に願う神権者の靈感に満ちた言葉を聞いて、私は心から感謝しました。その祝福の言葉の終わりには特に熱意を込めて「アーメン」と言いました。こうしてジェイミーには、これからどんな環境に住もうと、生涯を通じて導きを与えてくれる伴侶がついてくださることになったのです。聖霊の助けさえあれば、ジェイミーの小さな光もきっと大きくなっていくことでしょう。そして天の王国の中で大いなる喜びを味わうに違いありません。□
* サンドラ・C・プリンリーは英語教師、デビッド・R・プリンリーは英語教育アドバイザーとして共に現在日本で働いている。ふたりは福知山地方部豊岡支部の会員である。



聖霊を 伴侶とする

七十人第一定員会会員 カーロス・E・エイシー



多くの未婚の末日聖徒にとって、特に独身の姉妹たちにとって、結婚を前提としたつき合いを始めることや、永遠の伴侶となる人を見つけることは実現しがたい夢となっています。それらを心から望みながら、また福音の中であって永遠の伴侶を得ることは欠かせない重要なことであるのを知りながら、ふさわしいパートナーに巡り会えず悩んでいるのです。

私は皆さんをすぐにでも完璧な伴侶に引き合わせ、永遠に喜び多い結婚生活に送り出せたらと思います。しかしこのようなやりかたはサタンの望む方法です。覚えておいででしょうが、サタンは私たちの試しと選択の機会を奪うことにより御父の計画を挫き、進歩を阻まんとして私たちの生活を自分の思いどおりにすることを望んだのです。

結婚を前提としてこの世の伴侶とつき合いを進めていく中で、皆さんはすべての物事を自分ひとりで計画し、何でも思いどおりに進めていくことはできません。しかし、そういうつき合いとは違って、完全に皆さんの思いどおりになるつき合い方がここにあります。それは年齢や性別にかかわらず、すべての人々がともにできるつき合い方です。このつき合いの中で、私たちの伴侶は孤独感を癒し、私たちによりすぐれたものを求めさせ、人生に意義を与えてくれます。この伴侶とは神会のひとりのお方、聖きみたま、慰め主、啓示者、聖めのお方、主のみたまです。それは皆さんが独りぼっちではないこと、決して孤独ではないことを確信させてくださる方です。

伴侶としての人と人とのつながりは大切なものです。ふたりが愛とお互いに対する尊敬の念によって結ばれている場合はなおさらのこと、本質的にすばらしい状態が生まれ、口には言い表わせないほどの喜びがもたらされます。しかしそのような状態も、聖霊の導きがなければ無味乾燥なむなしなものになってしまいます。いかなる人との関係も主

のみたまを伴侶とすること以上に重要であったためしはないのです。

「彼らが切に望むことを……願った」

キリストがニーファイ人に教えを説かれ、祈られたときに「かれらが切に望むこと、すなわち聖霊をかれらに与えたもうことをねがった」(IIIニーファイ19:9)のには大きな意味があります。教会の会員として私たちは信仰、悔い改め、バプテスマ、聖霊の賜を授かるための権威ある者の手による按手札といった必要なステップを踏んできました。しかし友達や伴侶との愛が、もろい植物のように手をかけ養われていかなければならないように、聖きみたまとの関係も私たちが心して養っていかなければなりません。

若いころ、私はひとりの美しい女性に恋をしました。この世のほかの何よりも、私は彼女の愛を求め、ふたりの関係が永続するよう願いました。そのために私は自分の礼儀を正し、言葉を正し、最善を尽くして彼女に接し、気に入られるように努めました。そして彼女との結婚が決まってからも、私はそうした態度を続けていくことの大切さを感じたのです。そんな私が心から願ったのは、(今もその気持ちは変わりませんが)彼女を喜ばせ、感情を害さないようにすることでした。彼女は私にとって気高い生活を送るための靈感の源、動機づけとなってきているのです。

聖霊を伴侶とする場合もこれと同様です。聖霊の力を受け、共にいてもらうには、私たちが最善を尽くし、聖霊を受けるにふさわしくならなければなりません。聖きみたまを引きつけて常にそばにいてもらうためには、次のような事柄を実行していかなければなりません。

1. 体を清く保つ。

私たちは、何であろうとこの肉の幕屋を汚すようなことをしてはなりません。知恵の言葉を守り、生殖の力を誤用

聖霊は孤独を癒し、
私たちによりすぐれたものを求めさせ、
人生に意義を与えてくれます。
それは皆さんが独りぼっちではないこと、
決して孤独ではないことを確信させてくださる方です。

せず、病気や肉体を冒すものに身をさらさないようにできる限りのことをしなければなりません。「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。

もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」(I コリント 3 : 16-17)

2. 思いを清く保つ。

私たちはあらゆる下品な思いや肉欲的な考え、その他サタン力から身を守らなければなりません。教義と聖約には次のような忠告と約束がなされています。「絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。聖霊は常に汝の伴侶となり……。」(教義と聖約 121 : 45-46)

そのような中から生じてくる邪悪な思いや卑わいな考えほど不愉快なものはありません。「二心の者」、すなわち悪にも心を向ける者がどうして聖霊を伴侶とすることができるのでしょうか。できるはずがありません。

3. 信仰を實踐し、心の中に聖きみたまが宿るようにする。

私たちは、信仰を持たない者は神のみたまの贖れを受けることができないと教えられています。モロナイは、癒しと異言を語る賜を含むみたまの賜について率直に語り、こう忠告しています。「私が以上述べた『みたま』の賜物が皆世の人の信仰が足らないのでなければ世界のあるかぎり決してなくなることを忘れるな。」(モロナイ 10 : 19)

私たちはキリストを信じてこそ「心に聖霊を受けること」(モロナイ 7 : 32) ができることを理解しなければなりません。聖霊が証している方々について心に留めることをせ

ずに、どうして聖霊に受け入れてもらえるでしょうか。キリストのような生活を願い求めることこそ真の礼拝、すなわち生活の中に聖霊の力を受けられる礼拝と言えるのです。

4. あらゆる不正と邪悪な行ないを避ける。

主のみたまは人に祈るように教え、勧めています。(II ニーファイ 32 : 8-9 参照) キリストのみ言葉は、私たちに聖きみたまがどのようなお方でどのようにしたら私たちの生活に招き入れることができるかを教えてくれます。(II ニーファイ 32 : 1-3 参照) また神のみたまは人に善を行なわせ、キリストを信じるよう導きます。(イテル 4 : 11-12, モロナイ 7 : 16-17 参照) したがって祈りと聖典の勉強、正しい生活は欠かすことのできないものです。懐疑論者や福音に改宗したばかりの人々は、こう尋ねるかもしれません。「なぜ聖霊を求めるのか。なぜ聖霊を伴侶とするのか。聖霊は私たちにどんな働きをしてくれているのか。」主のみたまと親しく接している人々の証に耳を傾けるならば、これらの質問に対して様々な答えが返ってくるでしょう。またそれらの証は聖霊を伴侶とすることがなぜ大切なのか、その疑問にも答えてくれるに違いありません。

皆さんは完璧な洞察力と、特定の状況でどう行動していったらよいかをあらかじめ知る力を受けたいと思っているのでしょうか。もしそうだとしたらニーファイが言っていることを実行しなければなりません。彼はこう言っています。「道によって入り聖霊を受けるならば、聖霊はあなたたちの行わなくてはならないことをみな教えたもう。」(II ニーファイ 32 : 5)

「皆さんは識別の力を得たいと思っているのでしょうか。」

皆さんは識別の力、すなわち真理を見極める力を得たいと思っているのでしょうか。もしそうだとしたら、神のみ言

皆さんは完璧な洞察力と

特定の状況でどう行動していったらよいかを
あらかじめ知る力を受けたいと思っ
ているでしょうか。

皆さんは識別の力をすなわち真理を見極める力を
得たいと思っ
ているでしょうか。

皆さんは、神の啓示を聞き、感じ、知る力を
得たいと思っ
ているでしょうか。

葉を読み、神の徳を知り、熟考し、神に願い求めなければなりません。そうすればモロナイが証しているように「聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る」(モロナイ10:5)はずです。

私がテキサスで伝道部長をしていたときのことで、あるひとりの宣教師が証をなくして家に帰りがっているという知らせを受けました。いろいろ調べてわかったことは、その若者はある求道者の影響で自分の召しの神聖さに疑いを持ってしまったのでした。私はその求道者という人と面接をして、特別な識別の力によって、その人が大学生になりすまし、モルモン教会の熱心な求道者を装ったほかの宗派の牧師であることを知るに至ったのです。私に啓示されたその事実をつきつけられて戸惑った彼は、だましていたことを認めざるを得ませんでした。彼が去り、状況ははっきりしたことによってその宣教師は帰ることを思いとどまり、最後まで名誉ある伝道の業を続けたのです。

あるとき、2年前に私から伝道に出る許可をもらったというひとりの宣教師が、伝道も終わりに近づいた最後の週に私にそのときのことを打ち明けてくれました。彼は伝道に出る前に多くの罪を犯してきたため、私からいくつか条件が与えられてなかなか伝道が許可されなかったのです。彼はこう言いました。「エイシー長老、あなたは私が必要な悔い改めをし、従順にまた熱心に努力するという約束をしたあとで私に伝道に出る許可をくださいました。私は確かに熱心に努力してきましたし、すべての規則を守ってきました。」そのあとで彼は非常に大切なことを言ったのです。「私は自分の罪が赦されたと思っています。完全に清くなったと思います。」彼は自己を捨てた奉仕をすることによって、また聖きみたまに近づくことによって清められていったのです。確かに精練の火をくぐり抜けたことによって、

彼の心の中の不純なものはすべて焼かれてしまったのです。

「皆さんは神から啓示を受けたいと思っ
ているでしょうか。」

皆さんは、神の啓示を聞き、感じ、知る力を得たいと思っ
ているでしょうか。主は、予言者ジョセフ・スミスを通してこのように約束してくださっています。「われ今……聖霊によりて汝の智と情に告げんとす。……これは啓示の『みたま』なり。」(教義と聖約8:2-3)

神殿での集会で、マリオン・G・ロムニー副管長が証の最後で次のように述べられたのを聞いたことがあります。

「きょう私が述べたことは皆さんが耳にする必要のないものだったかもしれませんが、また新たに学ぶ必要もなかったことかもしれません。しかし私は自分で話しながら大切なことを学びましたし、自分にとっては必要な話だと思っ
ています。」これこそすばらしい聖きみたまの力の顕われと言えるでしょう。

皆さんは癒したり癒されたりする力や異言を語る力といったみたまの賜を得たいと思っ
ているでしょうか。そうだとしたら、予言者モロナイの言葉を心に留めてください。

「これらの賜物である力は、みなキリストの『みたま』から与えられ、キリストのみこころに従って分けられてそれぞれの人に来るのである。」(モロナイ10:17)

また、語る力すなわち天使のように語る力を願っ
ているでしょうか。そうであれば、次のニーファイの問いかけに心を留めてください。「あなたたちは聖霊を受けたら天使の言葉で語るができるかと私が言ったことを覚えていないのか。」(IIニーファイ32:2)

30年前、近東で宣教師として働いていたとき、私と同僚が分割と背教により分裂しかかっていたある支部の訪問を依頼されたことがありました。私たちは謙遜に祈りの気持

この世の男性女性共に
すばらしい能力と才能が与えられています。
しかしその才能がいかに偉大であっても、
聖きみたまとの接触がなければ
それらは価値のない幻影にすぎないのです。

ちをもってその責任にあたりました。不満を抱えた人々との重要な集会が開かれ、同僚が説教をすることになり、私たちはその支部の人たちを再びまとめることができるようにと心から願いました。共に断食し熱烈に祈ったあと、同僚は自信を持ってみんなの前に立ち、奇跡を行なったのです。彼の言葉はまさしく天使の言葉でした。あの未熟な若い長老の言葉が、彼よりはるかに年上の人々の心の傷を癒し、後悔を促し、文字どおりひとつの教会を救うことになったのです。

「皆さんは誘惑に立ち向かう力を得たいと思っているでしょうか。」

皆さんは誘惑を退け、それらに立ち向かう力を得たいと思っているのでしょうか。もしそうなら、アルマやパウロの言っていることに従ってみてください。「たえず目を覚して祈り、これによって聖霊の導きを得……。」(アルマ13:28)

皆さんは自分の行ないすべてに全き平安と確信を得たいと思っていますか。そうだとしたら聖霊を伴侶とするよう心がけてください。そうすれば皆さんもニーファイヤリーハイが受けた次のような確信が得られるはずです。「心を安んぜよ。汝らは創世の前より在りしわが深く愛する子を信ずる故、心を安んぜよ。」(ヒラマン5:47)

最後に、皆さんは生来の能力以上のことをする力を得たいと思っているのでしょうか。皆さんのなすことすべてに目に見えない力の助けを得たいと思っているのでしょうか。私は確かな権威をもって語ることでできる力を、ひいては考えていなかったことを語らせてくれるみたまのささやきを受け取る力を得たいと思っています。皆さんが必要としていることに気づく力を得たいのです。

この世の男性女性共にすばらしい能力と才能が与えられています。しかしその才能がいかに偉大であっても、聖き

みたまとの接触がなければそれらは価値のない幻影にすぎないのです。

皆さんは、聖霊を伴侶とするというこれらの話を人ごとのように思っていないでしょうか。決してそう思っていないと思います。神は人を偏り見られるお方ではありません。神の祝福と賜は、貴いごくわずかな人々のためにとっておかれているではありません。皆さんが使徒であろうと執事であろうと、あるいは扶助協会の役員であろうと初等協会の教師であろうと問題ではありません。自分自身をふさわしい状態に置きさえすれば、私たちもみたまの賜が受けられるのです。

この聖なる伴侶との関係が不完全なように思われる場合は、皆さんのバプテスマと確認の儀式を思い起こし、命じられたとおりに本当に聖霊を受け入れたかどうかを考えてみてください。また肉体的に清いかどうか、思いはどうか、キリストへの信仰の度合いはどうか、あらゆる悪事を避けているか、祈りと勉強の習慣はどうか十分に注意を払ってみてください。

時折思いを巡らし、自分が本当に聖霊のことを理解しているかどうか確かめてみることはいいことです。またじっくり時間をかけて自分がどれだけ霊的な賜や力を知っているかを考えてみることも必要なことです。洞察力や識別力、清め力や啓示、霊の賜、天使の言葉、確信から来る平安、豊かな祝福が生活の中に見られるかどうかよく心してください。日々の生活の中で霊的な経験をjする機会が頻繁にあるのでしょうか。もし何らかの分野で自分に欠けているところがあるなら勇気をもって自分を変え、秩序ある生活に立ち返ってください。

そのようにすれば、皆さんは決して独りぼっちになることはありません。なぜなら、皆さんはすべての中で最も大いなるもの、聖霊を伴侶とすることができるからです。□

我が家を訪ねてくれた ベンソン大管長

——ホームティーチャーを通じて——

ジョージ・D・ダラント

一日の大仕事を終えて帰宅してみると、妻は家から75キロほど離れた町に住む子供たちのところに行っていて留守でした。部屋には帰りが遅くなると書かれた妻のメモが置いてありました。

私はとりあえず食事の用意を終えると腰を下ろしました。そのとき、窓越しに我が家のホームティーチャー、セバン・ジェンセンとL・D・メイヤーズのふたりが玄関の方に向かって歩いて来るのが目に入りました。私はそれほど歓迎するでもなくちょうど食事をするところだったことを話し、数分後にまた来てもらえないかどうかを尋ねました。ふたりは快く承諾すると言いました。「約束をとろうと思って電話をしたんだが、留守のようだったんでね。来れば会えるんじゃないかと思って。もう一軒訪問したらまた来るよ。」

ふたりは30分ほどしてからもう一度やって来ました。親しくあいさつを交わしてから、セバンが笑顔を見せて言いました。「ジョージ、ベンソン大管長の書かれた記事の中からひとつ読ませてもらうよ。」興味深い話には違いなさそうでしたが、彼の次の言葉に、疲れ切っていた私の興味はたちまち薄れていきました。彼はこう言ったのです。「気落ちした状態から立ち直るための方法が12項目あげてあるんだが、ひとつずつ見ていこう。」（『落胆してはならない』「聖徒の道」1987年3月号参照）実は、私はかなり長い間そうした状態に陥りつつあったのです。

「項目1」，そう言うとセバンはちょっと間を置き、本から目を上げて私の方を見ました。そのとき、私たちは沈黙の内にお互いの気持ちを感じとったのです。私はこれまで、この忠実な兄弟と教会で幾度となく顔を合わせてきたときのことを考えました。セバンは私を見つけるといつも必ず握手をし、こう言ったもので



す。「ジョージ、君は今もなお福音が真実であると信じているね。」このような質問が来ることを承知していた私は、いつも背筋をできるだけピンと伸ばすと堂々として答えていたのです。「ええ、福音が真実であることは心から信じていますよ。」

すると彼は私の心の内を読みとるかのようにならず笑顔でこう言ったのです。「それならいいんだよ、ジョージ。」

記事の中の、気落ちした状態から立ち直る1番目の方法を読みながらセバンが言いました。「ジョージ、もし気落ちしているんだったら悔い改めることだよ。」

そして彼はこう尋ねました。「どうして悔い改めが必要かわかるかい。」「モルモン経に『絶望は悪い行いから来る』（モロナイ10：22）とあるからじゃないかな。」私が答えました。

セバンは記事の中からひとつずつ項目を拾いあげ、私の方を見てはこう言うの

です。「まるで君のことを言っているようだね、ジョージ。」彼は誠実な褒め言葉をもって、私が自分自身に対して良い思いが持てるよう助けてくれました。こうして10項目まで来たとき、私はこのまま終わらずにいつまでも続いてほしいという気持ちにかられたのです。部屋の中には心地良い雰囲気が漂っていました。

セバンは12番目の項目を言い終えると、本を閉じ笑顔を見せて言いました。「君の考えはどうか。」私はもう何も言うことができませんでした。まるでエズラ・タフト・ベンソン大管長が我が家を、そして私を訪ねてくれているようでした。大管長みずから出向くことができないために、代理として特別な使いを送ってくださったのだという気持ちでした。私は、ホームティーチャーの口を通して予言者の言葉を聞いたと思っています。そしてそのメッセージは確かに私の心を動かしたのです。

話も終わり、私たちは玄関の方へ歩いて行きました。セバンはこの訪問を通して何かを感じたのでしょうか。握手を交わしたとき彼の目はうるんでいました。こうして私のホームティーチャーは去っていましたが、彼らの伝えてくれたメッセージは今なお私の心の中に残っています。彼らが来たとき、私は確かに少々気落ちしていましたが、しかし今は違います。私は霊的に活気づけられ、再び責任を果たす備えができたのです。

その晩遅く、私は気落ちした状態から立ち直るための13番目の方法があることを知りました。それはホームティーチャーに来てもらい、彼らから愛と教えを受け、祝福を授かるということでした。□
*ジョージ・ダラント：ユタ州プロボ宣教師訓練センター所長。ユタ州プロボ、セントラルステーク部パークワード部会員。

父からのメッセージ

私がちょうど農場の仕事を終えようとしていたとき、母の呼ぶ声がしました。牛を牧場に放ち、うさぎやにわとり、豚、馬にはみな餅^{もち}をやり、しぼった牛乳も3本の容器に入れ、酪農場に運ぶばかりになっていました。

私はこのとき15歳でした。時は1936年、13人の大家族にとっては、経済的に厳しい年でした。兄弟のうちひとりとは伝道中で、8人が学校に通い、ほかの子供は家にいて母をてこずらせていました。

母は言いました。「ジェイ、きょうは学校を休んで、パシフィック・フルーツ・エクスプレスへ行ってもらわなければいけないわ。この手紙をお父さんに届けてもらいたいの。とても大切なものよ。それでなければ、あなたに頼んだりほしくないわ。」このパシフィック・フルーツ・エクスプレスは、列車のエンジンや車両を修理する工場でした。父は家計を支えるために、そこで働いていたのです。

母は封筒を私に手渡しました。学校を休ませるほどなので、とても重要な手紙だったに違いありません。「ごめんなさいね、ジェイ。」母は言いました。「でも、この手紙をお父さんに届けるには、あなたに頼むしかないの。」私たちの農場には、電話線が通っていませんでした。母は父に電話をすることができませんでした。

父の働いていた場所は、家から約24キロ離れていました。美しい初夏の空気の中をハイウェイまで3キロ歩くとすぐに、ある人が私を次の町まで車に乗せてくれました。町を歩いて通り過ぎると、また別の人が車に乗せてくれて、パシフィック・フルーツ・エクスプレスの正門へ続く舗装されていない道で降ろしてくれました。私は車を降りて、その運転をしてくれた人にお礼を言いました。そして父がよく話していたこの場所を見回しながら、正門へ続く20分ほどの道のりを歩きました。ここは父が汗にまみれて一生懸命働いている場所であり、私たち大家族にとってなくてはならない仕事場だと母が言っていた場所でした。

今まで気づきませんでした。父が夕方と土曜、日曜だけしか私たちと過ごすことができない理由はこれだと思いました。私たちに牛の乳のしぼり方、干し草の積み方、作物への水のやり方、馬を荷馬車につなぐ方法、柵の作り方、鶏小屋の作り方やそのほかの農場での必要な仕事の一切を教えてくれたのが母だったわけがこれだったのです。また、母と働いているときに、どうして母が上手に私たちに福音を教えてくれたり、聖書やモルモン経の物語を話してくれたかもわかりました。父の仕事場はここだったのです。そ

して、その仕事はとても大切で重労働だったのです。

門のところまで来ると、鉄道のレールがたくさんあるその両側に大きな建物が見えました。列車の車両が繋がれるときにぶつかり合うその音は、とても大きいものでした。スチームエンジン、警報機、警笛などの音響、空気ハンマーやそのほかの鉄道器具を使って働いている人たちの物音がさわがしく聞こえてきました。

突然、かん高いサイレンが鳴り響いていっさいの音がかき消されました。昼食の時間でした。ここかしこから人々が現われ、様々な声が聞こえてきました。こんなにたくさんの人たちの中から、どうしたら父を捜すことができるだろうか、私は思いました。

私は門を抜け、だれかに父の居場所を聞くことができるかもしれないと思い、一番近くに見えた仕事場に向かって歩きました。広々とした場所のまわりに器具や道具が大きく山積みになっていました。その場所の向こうを見ると、すぐに父を見つけました。私は立ち止まると、その場に釘づけになって、自分の視界からほかの人たちがまったく消えてしまったかのように感じました。まるで世界には父と私のふたりだけになってしまったかのように、このときに見た光景を私はいつも感謝するでしょう。父は、山積みされた器具にもたれながら足を伸ばし、帽子を横に置いて座っていました。両ひざの間に弁当を置き、両手を組んでひざの上に置いて頭をたれ、神が与えてくださっていることやほかのたくさんの方のことについて感謝を述べていました。父が頭を下げていた時間や、そのとき受けた印象から、おそらくそうだろうと私は思いました。私は立ったまま黙って一心に見つめていると、私の心の中にひとつの考えが沸き上がってきました。「父はだれに見せようとしているのでもない。父は本当に神を信じているのだ。」祈りが終わると父は、すぐに私に気づきました。柔和な微笑^{ほほえみ}が父の顔に広がり、私が近づいて行くと、目には涙があふれていました。「ジェイ、おまえに会えてうれしいよ。」父は言いました。「ここにきて座りなさい。」

私が母に頼まれて父に渡した手紙の内容は今もわかりませんが、父が私に伝えてくれたメッセージを、私は決して忘れることはありません。□

レイ・L・パッカード

私は静かにその様子を見ていました。
父は地面に座っていました。



あなたの知らない

両親のために

ジェリー・ダナウェイ

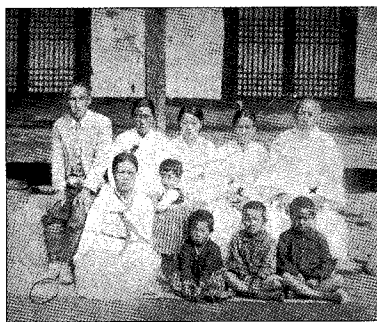
系 図探求と伝道は平行して行なわれます。どちらも神の子供たちに福音と救いの儀式とをもたらします。一方はすでに死んだ人々に、もう一方は生きている人々に。伝道中の私は、一度に両方を行なう機会に恵まれました。

私は韓国南部のウェオンジュという所に、1958年に生まれました。後にアメリカの家族の養女となり、14歳のときに教会に入りました。1年後、私は高校を出てから何をすべきかについて考え、祝福師の祝福を受ける決心をしました。祝福師にその話をすると、彼は、私が知りたいと思っていることについて、断食して祈るように勧められました。その勧めに従い、やがて私は祝福を受けました。祝福文の中のほとんどの約束について平安な気持ちを抱くことができたのですが、一部、どうしても不可解なところがありました。

「あなたは、あなたの家族やあなたの知らない両親のために働くという、すばらしい特権にあずかるでしょう。もし家族の記録を調べるなら、天からの助けがあるでしょう。もしあなたが断食し祈り、忠実にあなたの時間と才能を神に捧げるなら、諸天はあなたの祈りにこたえを与えてくれるでしょう。」

私は、系図を調べる必要があることはわかっていましたが、「あなたの知らない両親のために」という部分について理解できませんでした。私の実の両親がだれなのか知りませんでしたし、探し出す方法さえまったくわからなかったからです。私の知る限りでは、私が養女としてもらったときにはすでに「親」と呼べる人はおらず、私は孤児だったのです。

大学での最後の学期に心から祈り求めたとき、伝道に出ようという思いを強く抱きました。宣教師申請書を書き終え、書類を送りましたが、母国の韓国に召されるのではな



いかと心配しました。私は、韓国へだけは行きたくなかったのです。数週間たって、伝道の召しがきました。それは韓国ソウル西伝道部への召しだったのです。

その召しを受け入れるまで、私の心の中には大きな^{かつどう}葛藤がありました。しかし時間が近づくにつれ、私は自分の祝福文の約束を考えるようになりました。これ以外にどんな方法で、系図を調べることができるだろうか。私は韓国に行く必要が

あったのです。

韓国の伝道本部に着いてから、伝道部長が私に尋ねた最初の質問は、「ここにいる間に、系図を調べようと思いませんか」というものでした。その質問に驚き、また励まされて、私は答えました。「はい、そうしたいと思っています。」

3カ月が過ぎました。そのときまで私は韓国語を学ぶことに没頭していて、系図探求についてはまったく手をつけていませんでした。ある日、私は系図探求のことを思いつき、韓国人の私の同僚とほかの韓国人の宣教師に系図を調べるのを助けてくれるように頼みました。彼らは私の願いを快く聞き入れてくれました。そこで私たちは、宣教師に与えられる休みの日に、私の養子縁組を取り扱った公的機関を探しに出かけました。その機関の担当者の人たちは、私たちの調査が系図探求だとわかると、記録にくまなく目を通し、私に関する記録を見つけ出してくれました。

もうひとりの幼い少女

私の記録の隣りに、私の赤ちゃんのときとそっくりの写真が張ってあるもうひとりの幼い女の子の記録がありました。私は何らかの理由で記録が混同したのだらうと思いましたが、実はそうではありませんでした。担当者の方たちは、私たちの名前の横に書かれた「ヒュンジー・イム」という言葉は、韓国語で兄弟あるいは姉妹を意味するということを説明してくれました。驚くべきことに私には姉妹が

いたのです。

養女の記録には、彼女のアメリカ名と住所が書かれていました。さっそくそのオクラホマにいる自分の姉へ手紙を書き、なぜ自分が韓国にいて記録を調べているのかを説明しました。私は、自分の住所がその記録にある住所からずでに変わっていたので、彼女の住所も変わっているかもしれないと思いました。また、彼女には新しい生活や家族があるので、私のことや私が調べていることにあまり興味を示さないかもしれないことを覚悟していました。

1カ月半が経過しましたが、彼女からは何の返事もありませんでした。もしかするとこのまま彼女からの返事は来ないかもしれないと思いましたが、私は決して希望を捨てませんでした。彼女のことを知りたいと思っていたのはアメリカの私の家族も同様でした。養父は、返事がない場合には、彼女を探しに行くつもりにさえなっていました。そうしてついに、2月14日、私の姉のライラ・リュウ・ミラーから私のもとへ手紙が届いたのです。彼女の両親は、まだオクラホマのその家に住んでいました。手紙の中には、夫と男の赤ちゃんと一緒に彼女の写真が1枚同封されており、手紙には彼女はとても私に会いたいと書いていました。

公的機関の私たちの記録には、ウェオンジュにある孤児院から、その機関が私たちを引き取ったということも書いてありました。ウェオンジュ・ヤンニョエ・ウェオンジャン——。私は韓国語の辞書で、自分のわからない部分、ヤンニョエという単語を調べてみましたが、ヤンニョエは養女で、ヤンノは養老院を指すだろうということだけしかわかりませんでした。

私は、ウェオンジュにいる何人かの宣教師に、1950年後半から1960年にかけて私が自分の記録を見つけたその機関による養子縁組にかかわった孤児院を探してくれるように、依頼しました。しかし、数カ月ほど探した後、何の成果も得られませんでした。

孤児院、それとも老人ホーム

このころ、私はソウルの郊外で伝道していました。そこでソウル西ステーク部会長のメンバーであるチェイ・ドン・ワン兄弟と親しくなりました。ある日、私が彼の家を訪問していたとき、祝福文の中の約束について話したところ、彼は助けを申し出てくれました。数週間後の休みの日に、彼と私の同僚と私の3人は、孤児院の手がかりを見つけるためにウェオンジュへ出発しました。

私たちは、まずカナダのキリスト教宣教師のオコナー姉妹という人が、記録を管理していたという孤児院を訪ねました。しかしそこで、彼女は1960年代にカナダに帰国しているということを知らされただけで彼女に会うことはできませんでした。私たちには、もう1軒訪問するところがありました。それは私たちの記録に載っていたヤンニョエ・

ウォンジャン孤児院です。しかし、訪ねてみるとなんとそこは孤児院などではなく、老人ホームでした。しかし私は、以前にそこにいたようなとても妙な気持ちになりました。私は、非常に混乱しました。老人ホームであるはずのヤンニョエ・ウォンジャンになぜそのような気持ちを感じたのかわからなかったのです。

どうやらこの調査は無駄なようでした。私たちは落胆しました。でもあきらめませんでした。チェイ兄弟と私は、先の機関に戻り再度記録を調べることにしました。そして再び記録に目を通したとき、私たちは書類の隅に韓国語で書かれた「オコナー」という名前を見つけました。あの老人ホームは、かつては孤児院で、実は姉と私が養女に行くまで住んでいた場所だったのです。こうして私たちは、やっと私と姉の出身地を知ることができました。

チェイ兄弟は、韓国の新聞のひとつに私の調査についての記事を書けるように提案しました。彼は、朝鮮戦争以降、多くの人々が、行方不明になった家族を探すために新聞を利用したと教えてくれました。私たちは新聞記者に会い、私の姉と私のおおまかな特徴と、知っている限りの経歴を新聞に載せてもらうように彼に話しました。1984年6月2日、その記事は新聞に掲載されました。すぐに、私たちがあなたの家族ではないかと、たくさんの人々からの電話を受けました。

変わった電話

ある変わった電話がかかってきました。相手の話すことをすべて理解することはできませんでしたが、同僚の助けによって、その男性の名前がコー・イン・スーであることを知ることができました。彼は、ウェオンジュの郊外にあるシリムという小さな村から電話をかけてきており、1950年代の後半に彼の家族が養女に出した双子の姉妹について話してくれました。私は、自分と自分の姉が双子であるとは思いませんでした。確かに私たちの赤ちゃんのときの写真は似ていましたが、私の姉と私の誕生日は違っていたのです。

コー・イン・スー氏は、私たちを家に招待してくれました。そしてもしできれば、ソウルに住んでいる自分の息子コー・フン・キューにも会ってほしいと言いました。コー・フン・キュー氏と彼の母が、双子の娘を孤児院に連れて行ったというのです。さっそく私たちは彼に電話をして、会う手はずを整えました。

もしこの人の話が本当だとしたらどうしたらいいのだろう。そうしたら、コー・フン・キュー氏は私の親戚になるのです。私は彼に会う心の準備ができていのかどうか自信がありませんでした。コー・フン・キュー氏と彼の奥さんに会ったとき、彼は私をじっと見つめ、私が彼のおばにそっくりだと言いました。目に涙を浮かべて、彼は話し始め



42ページ：筆者の母親は父
母を右側に、兄と兄嫁を左
側にして、後列の中央に位
置している。いとこのコ
ー・フン・キュウは、一番
右側の地面に座っている男
の子である

44ページ

左上：母親の墓前にて、筆
者、彼女の兄、父と共に
上中央：新聞を見て筆者に
電話をかけたコー・イン・
スー氏とその息子コー・フ
ン・キュー

右：筆者が家族、友人と共
に、いとこのコー・スク・
テー（左から2番目）のバ
プテスマ会に出席したとき
の写真

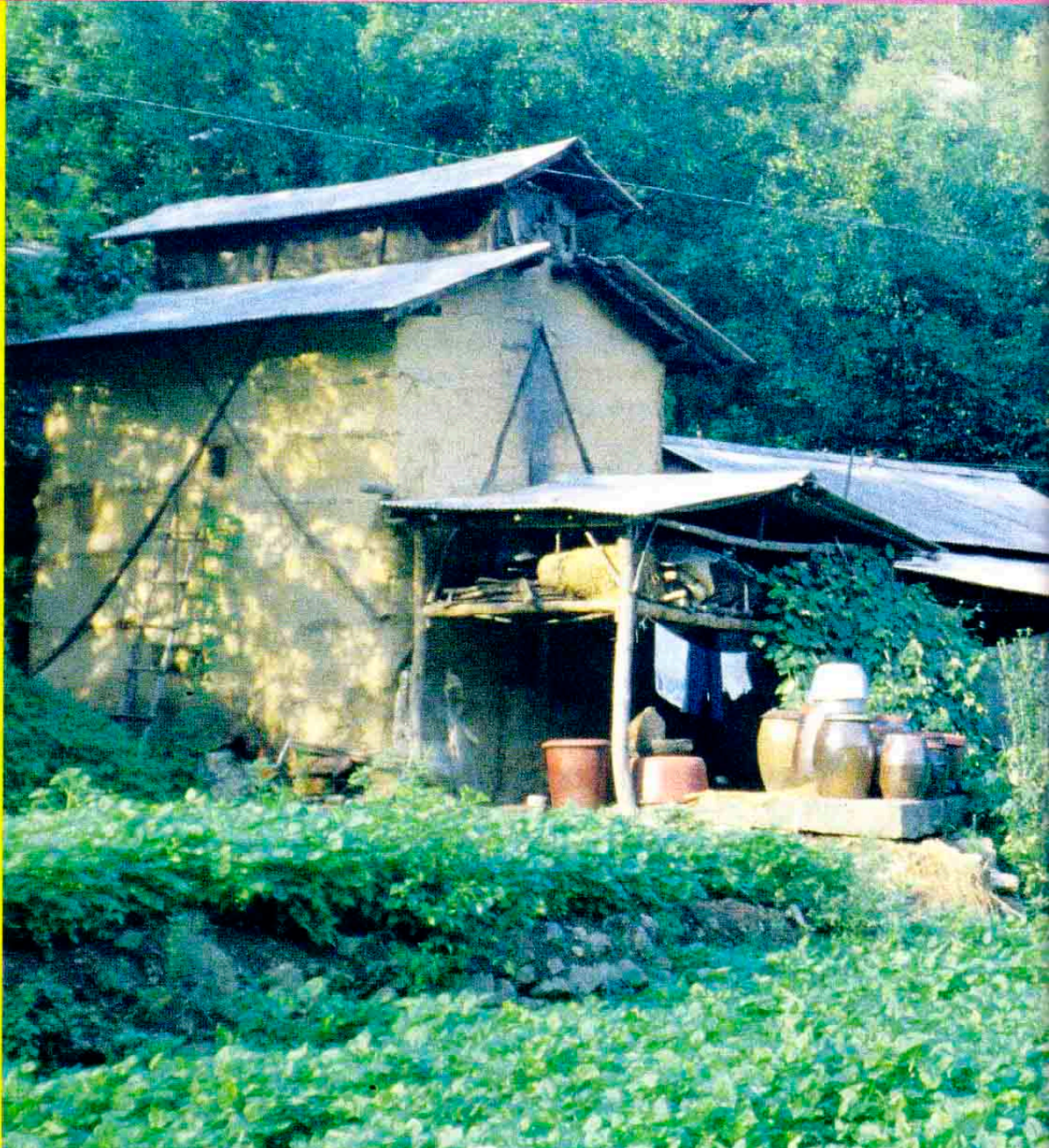
下：筆者と彼女の双子の姉
妹は韓国チュンブンにある
この家で生まれた

45ページ

上：筆者（左から2番目）
の兄キム・ドゥ・ユン（中
央）のバプテスマ会

下：筆者と彼女の夫ケリー
が彼女の父と義理の母を訪
ねたときの写真

下(風景)：筆者の父が住ん
でいる村の郊外



ました。彼は、双子を養女として手放したことを深く後悔している様子でした。私は信じられず、どうしても証拠となる写真や記録を見たいと思いました。それに、もし私たちが双子だったなら、なぜ生年月日が違うのかということが、どうしてもひっかかったのです。

コー・フン・キュー氏は家に私たちを招いて、家族のアルバムを見せてくれました。残念なことに、私の母だと言うその人の写真はありませんでした。私はまだ心の中で疑っていたので、シリムにいる家族に電話をし、彼らに会う計画を立てました。

シリムは、とても小さな村で、バスの停留所さえない有様でした。しかし私たちの乗ったバスの運転手は、私たちのためにシリムに特別に止まってくれました。暖かな日差しのもと、澄み切った空気を吸いながら私たちはあぜ道を歩きました。コー・フン・キュー氏に案内され、小さな店と家々がひとつかたまりになっている村に着きました。道を横切ると、門の所に、私たちを待っているひとりの老人がいました。小柄で、韓国の日差しで茶色に日焼けした人でした。

私の韓国の祖父

その老人は興奮した様子で、私をじっと見つめていました。彼の家は、木の皮と粘土と紙で作られていました。私たちは靴をぬいで、木でできた玄関から部屋に上がりました。部屋の一方の壁には、いくつかの箱、折りたたみのテーブル、座ぶとんや服といった物が積んでありました。

家族全員が私の周りに集まりました。彼らは私を見つめ、私の目や顔の輪郭が私の母だという人にそっくりだと口々に言いました。そして私が、手放した双子のひとりだと確信していました。

記録を見せてくれるように頼むと、彼らはほこりのかぶったアルバムを持ってきました。年老いた夫婦が、黄ばんだ家族の写真の端にいました。彼らの娘（私の母だという女の人）は、真ん中において、彼らの息子コー・イン・スー氏とその妻がその隣りにいました。コー・フン・キュー氏は前列にほかの子供たちと一緒に写っていました。私の母だという人と私は、まったく似ていませんでしたが、老夫婦と私は似ていました。この女性は、本当に私の母なのでしょうか。写真の中の彼女は小柄でひ弱で、とても26歳には



吹雪の中の レッスン

ロナルド・J・ダン

教会のバスケットボールのシーズンもそろそろ終わりに近づいた冬のことでした。私たちのワード部の若い男性のチームは1位にたち、決勝戦の前半でもすばらしい戦いを展開し、試合をリードしていました。私はすでに20点をあげ、それは出場した試合の内でも、最高の前半戦と言えました。でもそれと同時に、私はすでに4回ファウルをとられていました。もう1回ファウルをとられたら退場となるどころでした。

私はその日の出来が良かったのでつい高慢になって謙遜さを失っていたのです。私は、4度もファウルを宣告した審判は故意にそうしているのであって、私を困らせ退場させようとしているのだ、と思い込んでいました。試合中に何度か私は、スポーツマンシップに反する態度をあからさまにしました。つまり、審判の判定が間違っていることを彼自身や観客に対して公然と示そうとしたのです。

後半戦に入ってからすぐに、どうせファウルをとられて退場させられるなら、攻撃的なプレーを派手にしてやろうと決心しました。相手チームからパスを奪い、ゴールめがけて突進しました。楽に得点できる態勢でした。私とゴールの間にいたのは、相手チームで一番小柄な選手だけでした。ゴールに近づくと、私はドリブルをしながら左のひじで彼のあごにパンチを食らわせ、気絶させてしまいました。そうしてだれもさえぎる者がいなくなったところで、私は楽々と得点を入れました。ボールがネットをくぐって落ちてきたとき、審判のホイッスルが観客の歓声をかいくぐって、私の耳に届きました。

私はスポーツマンらしくない行動をとったことから、退場させられました。その途端、試合中ずっと私の心の中にたまっていた怒りが、不正なジャッジをするその審判に対するのしりの言葉となって爆発したのです。私はタオルを床に投げつけ、不平をわめきたてながらロッカールーム



に行く、汗まみれのユニフォームの上から素早く服を着込みました。そして、最後にもう一度その不正な審判に罵声を浴びせると、冷たい夜の寒気の中へ飛び出し、家に戻るために父のトラックに乗りました。

エンジンをかけながら、私は雪が降っていることに気づきました。でも、汗をかいていたことと気が高ぶっていたことで、コートを忘れたなどとは思ってもみませんでした。

まっすぐに家に帰る気にはなれず、友人を訪ねようと思いました。幹線道路から離れ、近道をたどっていくうちに、私は見慣れぬ片田舎へと来てしまったことに気づきました。雪は激しく降り続いていました。さらに車を走らせると、強い風が畑を横切って吹きつけ、高い雪の吹きだまりをつくっていました。そのため、私はまったく道を見失ってしまい、とうとうトラックは、大きな雪の吹きだまりの中に落ち込んでしまいました。吹きだまりの中から何とかトラックを出そうと、あらゆる手を尽くしましたが無駄でした。何度も何度も試みるうちに、車のエンジンが止まってしまいました。ガソリンが切れてしまったのです。

暗やみの中にしばらくの間座って、どうしたらいいか思い巡らしていましたが、寒さがつのって、容赦なく現実へと引き戻されていきました。汗でしめった服とぬれた運動靴の私の体はコートもなく冷えてふるえていました。寒気に閉ざされた白い雪原の向こうを見ると、遠くかすかな明かりが揺らいでいるのが見えました。

少なくとも1キロはあるようでした。こんな状態でここまでたどり着くのは、とても困難なように思われました。でも選択の余地はありません。私は凍りつく寒さの中に飛び出し、遠く離れた明かり目がけて全力で走りました。長い時間が過ぎたように思われました。やっとの思いで一軒の農家にたどり着くと、必死でドアを叩きました。しかし返事がありません。だれも家にいませんでした。

体の震えが止まらず、ほとんど凍りついたつま先や指や耳は、もはや何も感じなくなっていました。私は素早く、

二軒しかない家のもう一軒の家に向かって走り出しました。それは、道をたどって少し行ったところにありました。驚いたことに、この家は、私がとても行きたくない家、つまりあの「不正の審判」の家だったのです。しかし寒さで必死になっていた私は、思い切ってプライドを捨て、ドアをノックしました。ドアが開かれ、きびしい表情をしたついさっき私がののしり批判した人物が出てあいさつをしました。

私はどうかこうにか、事態を説明しましたが、どのような返事が返ってくるのかまったくわかりませんでした。しかし、何の躊躇もせずに、このすばらしい人物は、2着のコートに手を伸ばしました。1着は自分のため、もう1着は私のためにでした。それから、私が暖かい家の中で休んでいる間に、彼はトラクターとチェーンとガソリン1缶を取りに寒い外へ出て行きました。吹雪の中を私たちはトラクターに乗り、いくつもの吹きだまりを越えて私が置き去りにしたトラックまでたどり着きました。彼はトラクターを使って、ものの数分もかからないうちにトラックを道に引っ張り上げると、ガソリンを入れ、私に温かい言葉をかけて無事に家路へと向かわせてくれました。

それからの日々、私はあまりにも突然、しかもまったく予期せぬ形で私を謙遜な思いへと導いてくれたこの皮肉な出来事について、しばしば思いを巡らせました。助けを受けるにふさわしくない少年が、ひとりの優れた人物によって、ある寒い冬の日にすばらしい教訓を受けたのです。彼にすれば、暖かい家を離れて吹雪の中へ出かけることは、容易なことではなかったはずで、(特に、私のように無神経で思いやりのない者を助けに行くことは)でも、私には助けが必要でした。そのために彼は、みずから進んで私を助けてくれたのです。彼の模範やその他の優れた神権指導者の力で、私は次第に生き方を変え、伝道、そして神殿結婚への道をたどることになりました。私は、これらのことにいつも感謝しています。□



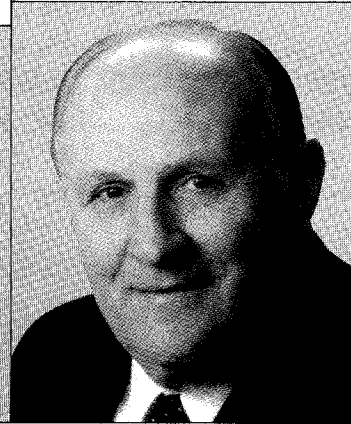
新たに組織された アジア地域会長会

本年6月1日付けで、アジア地域会長会の交替が発表された。

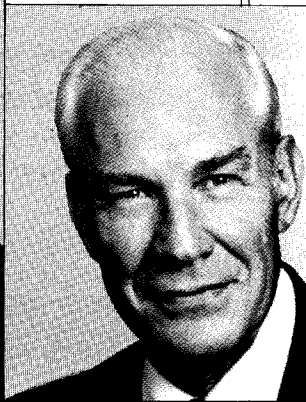
会長は、ヤコブ・ディヤガー長老に代わってダグラス・H・スミス長老、第一副会長は引き続きアドニー・Y・小松長老、第二副会長にはダグラス・H・スミス長老に代わり、ロイデン・G・デリック長老がそれぞれ任命された。



第一副会長
アドニー・Y・小松



会長
ダグラス・H・スミス



第二副会長
ロイデン・G・デリック

コロンビア共和国と ユタ州で、 新たに神殿建設 用地を購入

大管長会は、教会全体の神殿活動の増大に伴い、コロンビア共和国のボゴタ市と、ユタ州バウンテフル市の2カ所に神殿建設予定地の新たな購入を発表した。

明確な着工予定はまだ明らかになっていないが、購買が可能になったため購入が決定した。

1984年に新しい神殿の建設が発表されたとき、ボゴタ市は予定地のひとつであった。購入面積は約1.5ヘクタールである。

バウンテフル市の神殿用地はソルトレークシティから約5キロ北上した場所にあり、ソルトレーク盆地を見おろす位置にある。敷地面積は3.5ヘクタールである。

現在、カナダのオンタリオ州トロント、合衆国のネバダ州ラスベガス、オレゴン州ポートランド、カリフォルニア州サンディ

エゴで新しい神殿の建設が進んでいる。また、現在大規模な修復工事を行なっている神殿、および近く修復工事が予定されている神殿は、スイス神殿、アルバータ神殿(カナダ)、オークランド神殿(カリフォルニア州)、ハワイ神殿の4カ所である。

中国での 教会の発展

「主はその大いなるみ業を、このすばらしい土地で成されるであろう。」5月22日、日曜日、七十人第一定員会会員であるダグラス・H・スミス長老は中国北京支部での集会でこのように語った。

現在、スミス長老は、アジア地域会長会会長として、妻であるバーバラ・B・スミス姉妹と共に香港に滞在している。元中央扶助協会会長であったバーバラ姉妹も支部の集会でスミス長老と同様に話をした。

その会には9カ国から65人が出席した。これは、新しく組織された北京支部の出席者数としては過去最高である。

北京支部の支部長であるアルフレッド・D・ウィルヘルム・Jr.兄弟は、北京の米国大使官で随員として働いている信仰深い教会員である。彼の話によると、北京支部に集っている会員は皆忠実で、定例集会には定期的に参加し、敬虔な教会員としての生活を送っているという。「いつの日かここで何か大いなる業が行なわれると思います。」これは、ウィルヘルム兄弟の言うところである。

北京支部と新しく上海に設立された支部は、おもに外国人教会員とその家族のために建てられたものである。

教会とそのメッセージについての関心は、中国の人々の間でも高まっている。仕事や勉強で海外に渡り、福音が宣べ伝えられているたくさんの地域で教会員と親しくなり、福音の真の愛と友情を肌で感じてきた人々である。

5月22日の日曜日、スミス夫妻は定例集会のほか、特別ファイヤサイドでも会員たちと共にひと時を過ごした。また前日の5月21日には、北京北部にある万里の長城で支部の野外活動を行なった。国籍の違いを越えて多くの教会員が福音を分かち合ったこの活動は、中国の首都、北京で行なわれたこのたびの行事のハイライトであった。

全盲というハンディを背負いながら、1953年から今日に至るまで、オルガニストの責任を果たしておられる伊藤清兄弟の手記です。

主の教会で受けた拍手

大阪北ステークス部岡町ワード部 伊藤 清



私は37年前にバプテスマを受け、今では愛する妻と娘夫婦、高校生になる息子、かわいいふたりの孫と共に教会に集い、信仰生活の喜びを感じています。思えば長い教会員生活ですが、私は音楽と英語というふたつの才能を主からいただき、これによって奉仕の機会を与えられたことが、大きな支えとなってきました。

私は、1935年5月、全盲という大きなハンディを背負ってこの世に生を受けました。初めは、少しでもこの目がよくなればと、両親は私を連れてあちらこちらと病院回りをしたそうです。しかしながら、どこへ行っても「残念ながら今の医学ではどうにもなりません」と医者たちからにべもなく断われたと、後に母が愚痴まじりに言っているのをよく耳にしました。

私は成長していくにつれて次第に心に不安を覚えました。目が見えないことでいじめられることも多く、さらに家庭は両親の仲が険悪で暗い雰囲気でした。そのうえ、父が働くことに意欲をなくしたために、だんだん貧しくなっていました。そして、とうとう小学校5年生のころから中学3年生まで、昼の弁当を持っていくことさえできない状態が続きました。

いつしか、私は昼食時になると空腹を忘れようと、ひとり音楽室に入り古いピアノをたたくようになりました。そうしたある日のこと、音楽の先生に呼ばれ、「いつもお弁当の時間にそうしてピアノを弾いているが、そんなにピアノが好きなのか」と聞かれました。弁当のことも言わずに「はい」と答えると、「ひとりでピアノを弾いていると我流になる恐れがある。放課後、私と一緒に勉強してみないか」と勧められ、それ

から毎日、放課後その先生から手ほどきを受けることになりました。続けていくうちに、弁当のことや様々なつらいことも忘れ、ただピアノの音を聞いて慰められ、学業の方でも大いに励みとなりました。

1950年7月、私が中学3年生のある日のことです。私は電車の中で偶然ふたりの姉妹宣教師に会いました。彼女たちの勧めのままにこの教会を訪れたとき、ちょうどMIAの集会が行なわれていました。初めて訪問した私に何人もの温かい手が差し出されました。そしてそこでピアノを弾く機会も与えられ、それまでに感じたこともない温かく強い拍手につつまれ、感激しました。このことは、忘れることのできない思い出として今でも脳裏に焼きついています。それまでも校内の音楽会などで、習い始めたピアノを弾かせてもらったこともあるにはあったのですが、拍手もお義理で、パラパラ聞こえてくる程度でした。しかし、このときの拍手の音は比喩のものになりません。私はその夜、興奮して眠れなかったことを覚えています。たくさんつらいことがありましたが、ピアノをやっていた良かったとしみじみ思いました。

1951年3月、中学校を卒業すると同時に私は迷わずバプテスマを受け、この末日聖徒イエス・キリスト教会の一員となりました。そして、4月からは両親の反対を押しきって、盲学校の音楽科に入学しました。当時、目が見えない人たちにとっては、すぐに開業できる、あんま・はり等を学べる医療科に入るのが常識になっていました。なぜなら、盲学校の音楽科で勉強した程度では、到底生計を立てることはできないからです。リサイクルなどをするにしても、

晴眼者の技術と盲人のそれとの間には、あまりにも隔たりがありすぎるうえ、盲人用の楽譜を作る所が日本には1カ所しかないので、お金がかかりすぎるからです。しかし、思いきって音楽科に入った私の心には、いつの日かもう一度、初めて教会で受けたあの感激を味わってみたいという気持ちと家の中の暗い空気を吹き飛ばしたいという強い願いがありました。

1953年、私は出席していた支部のオルガニストに按手任命され、それ以来きょうまでこの責任を果たしています。幸い、盲学校は音楽科といっても月謝が安いので、晴眼者の生徒もたくさんいて、知らない讃美歌はその人たちに何回も弾いてもらって覚ええました。地方部大会などでも伴奏する機会が与えられ、私もやればできると張りきってその責任を果たしました。しかし、そのころから「伊藤兄弟の伴奏は、聞いて覚えているので不正確だ」とか「これ以上伴奏を続けていくのはむずかしいのではないかな」などとささやく声を耳にするようになりました。目が見えないことからくる残念さ、無念さというものを味わいながらも、この伴奏の責任を果たしていきたいと真剣に祈り求めました。

神様は、そんな私の祈りにこたえてくださいました。それは、23歳で結婚してからのことです。妻が点字の楽譜の勉強をする決心をし、勉強を始めたのです。これは素人には非常にむずかしいことですが、妻はそれをマスターし、讃美歌を全部点訳してくれるようになりました。私には想像もなかったほど大きな恵みがもたらされたのです。

最初この伴奏の責任に召されたときは、

日本一の伴奏者になろうと意気込んでいましたが、今では日本一息の長い伴奏者になりました。毎週、指示される讃美歌は、たとえよく知っている歌であっても、いつも予習し、出席した人たちにいい気持ちで礼拝してもらうために、開会前の演奏には特に心配りをしています。

さて、音楽のほかにもうひとつ私が一生懸命学んだことがあります。それは英語です。私が10歳か11歳のころから、日本語とはまるで違う、明るくて抑揚があって、楽しそうな言葉をあちらこちらで聞くようになりました。日本に来ていた駐留軍の人たちが話していた英語でした。聞けば聞くほどその魅力にとりつかれ、なんとか自分もひと言でもふた言でも話せたらと強く思うようになりました。しかし、だれも教えてくれる人はいませんでした。ある日、ラジオで英会話の講座をやっていることを知って以来、それを一日も休まず聞くことになりました。初めはいくら聞いても少しも上達しない自分に愛想が尽きて、やめてしまおうと思ったことも何度かありました。しかし、中学2年になったとき、大きな決心をしました。普通の人には、本や辞書があるけれども私にはない、だから普通の人の倍の時間をかけてとにかく頑張ってみよう、そう決めたのです。そして、毎日ラジオを聞くこと、覚えた単語や熟語は忘れないようにすることを心がけました。これは今でも続けていることです。

そして主は音楽だけでなく、英語でも私

に奉仕する場を与えてくださいました。

1970年の万国博覧会にモルモン館が开展され、ブロックバンク長老がその指導のために日本に来られました。彼は博覧会の期間中、私の所属している支部に出席されるようになりました。長年努力した甲斐があって、私はそのころには聖餐会のお話などを同時通訳できるようになっていました。ようやく苦勞して勉強した英語が生かされることになり、やめないでよかったとつくづく思ったものでした。

そんなある日、私たち夫婦にハワイ神殿参入の機会が与えられました。長い間の望みでしたが、その日暮らしの私たちにとっては到底かなわぬことと、半ばあきらめていました。しかし、ブロックバンク長老ともうひとりの方が、通訳のお礼に費用の半分を出してくださると言われたのです。私たちは信じられない思いでした。

神殿参入と合わせて、現地のワード部での聖餐会で伴奏することができたことも、すばらしい祝福でした。

私の信仰生活の中で、もうひとつ忘れられないことがあります。それはスペンサー・W・キンボール十二使徒定員会会長をお迎えてステーキ部大会が行なわれたときのことで、伴奏の責任を果たし、やがてスライドを見ることになりました。しかし、私は雑音の多い説明を聞くだけで半ばうんざりしていました。するとキンボール長老が「わかりますか」と声をかけてくださいました。雑音が大きくてわかりにくい

ことを申しあげると、「今、ジョセフ・スミスの家が映っています。大きくはないがきちんと整理されています」とか、「14歳のジョセフ・スミスが祈るために森の中に入りました」と、スライドが終わるまで場面場面を説明してくださいました。あのときのキンボール長老のやさしい心遣いは生涯忘れることができません。その集会が終わった後、「あなたは音楽で伝道をするのがよろしいでしょう」とおっしゃってくださいました。

それから後、たくさんのワード部やステーキ部からのコンサートの依頼を受けました。どこへ行っても一生懸命に演奏しました。そして、訪問先で証を述べる機会もいただきました。どこへ行っても私が最初にこの教会を訪れたときに受けたあの拍手が聞こえます。そしてそれを聞いたときにやはり勉強を続けてよかったと思い、それがまた、これからの勉強の支えとなっています。しかし、何よりもうれしいのは、こんな私の姿を見て、この教会が真実であるという証を強め、賛同してくださる方がいらっしゃるといことです。このような方法でも私にも奉仕する機会があることを心から感謝しています。

私は自分が今までに経てきた多くの経験を通して、神は実に愛のあるお方であること、この教会が真実の神様の教会であることを証します。(いとう・きよし 1935年生まれ、岡町ワード部オルガニスト)

新役員 の 任命

6月15日から7月20日までに管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の変動(敬称略)

●札幌西ステーキ部室蘭ワード部

新監督: 川上輝男(前任者: 川崎英三)

●釧路地方部帯広支部

新支部長: 河田利夫(前任者: 今村安孝)

●釧路地方部北見支部

新支部長: 加藤敏行(前任者: 高瀬健二)

●郡山地方部会津若松支部

新支部長: 高橋信幸(前任者: 斉藤雄仁)

●郡山地方部いわき支部

新支部長: 尾久幸男(前任者: 神尾茂)

●新潟地方部三条支部

新支部長: 古川正博(前任者: 熊谷正行)

●新潟地方部新潟支部

新支部長: 吉田博(前任者: 大関洋一)

●福知山地方部彦根支部

新支部長: 小菅篤史(前任者: 下川光男)

●福知山地方部西脇支部

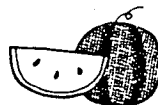
新支部長: 井上孝(前任者: 門脇保文)

●熊本地方部長崎支部

新支部長: 竹馬庸裕(前任者: 辻郷美太郎)

●鹿児島地方部都城支部

新支部長: 黒木昭仁(前任者: 永吉幸一郎)



編集室から

《原稿を募集しています》

▶各地のたよりの原稿を常時募集しています。改宗談や日々の信仰生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本誌を読まれての感想文(「読者のひろば」)やカットなどをお送りください。

▶本年12月号掲載分の締切は9月30日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)と教会での責任(役職名)、生年月日を記入してください。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

▶あて先: 〒106東京都港区南麻布5-10-30末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264

名東北ワード部 名東南ワード部



●全国各地のワード部/支部をご紹介するコーナーです。

名古屋ステーキ部

前を伊勢湾、後ろを飛驒の山々に囲まれ、揖斐、木曾、長良、3つの川を従え、本州の中心名古屋に私たちの名東北、名東南の両ワード部があります。名古屋から東へ10キロほど行った閑静な住宅街に教会が建てられたのは今から9年前、また4年前には献堂式も行われました。

白と茶の見事なコントラストの教会堂の玄関前は、美しい花々が咲き誇っています。

現在、両ワード部がひとつの教会堂を時間をずらして集会用に使っています。どちらのワード部にも乳児から年輩の方まで各年代にわたって幅広く、100名を越える活発な会員が集っています。

名古屋市郊外には大学が数多くあり、学生の会員も多く、セミナーやインスティテュートの活動も盛んです。独身成人の活動も活発で、天父のプログラムの力によって若い兄弟姉妹が日増しに成長し、それぞれが証を強めています。

北ワード部では毎月誕生日会を開き、会員の親睦をはかり、一致団結して活動しています。去年のステーキ部運動会では競技、応援合戦ともに優勝し、素晴らしい成果を修めました。

南ワード部は扶助協会の姉妹たちを中心に、各種の音楽祭などで素晴らしい成績を修め、ステーキ部大会などでは多くの兄弟姉妹が聖歌隊に選抜されています。

私たち会員は共に学び、成長し、証を強め、益々この教会を発展させ、名古屋の地にシオンを築きたいと思います。



22歳の誕生日

名東北ワード部
劔秋雄

1978年6月18日の夜、ふたりの外人の方が、私の家を訪れました。その日は私の22歳の誕生日でしたので、何か良いことであろうと思い、彼らの話を聞きました。数回目のレッスンのとき、ニーフアイ第三書を読んでくださいと言われ、彼らが帰られたあと、ひとりで読んでみました。心の中に、平安とでも言いましょうか、赤子が母に抱かれるときのような愛を感じ、モルモン経は神の書物であると知り、バプテスマを受けてもよいと思いました。当時、正直言ひまして自分から受けたいという思いは弱く、雨の日でも来て下さる宣教師を、悲しませたくないという気持ちからでした。

宣教師に、教会へ来ませんかと誘われて、次の日曜日、何だかとても良い所へ行くといい、誇らしげな気持ちで教会へ行きました。まだ知恵の言葉を知りませんでしたので、たばこを胸ポケットに入れて、集会に出たことを覚えています。教会に入ると、一人一人が笑顔と握手で迎えてくださり、今まで経験したことのない良い気持ちを感じました。それから、すぐにバプテスマの予定が決まり無事にバプテスマを受けることができました。平日の夜でしたが、多くの方々が来てくださいました。

改宗してから、周りの人々が本当によく支えてくださいました。何か行事がありますと毎回電話を入れてくださったホームテ

ィーチャー、また独身成人の兄弟姉妹との活動や、インスティテュートですばらしい教師より受けたレッスンによって、主の教義を正しく理解し、主の教えを守る大切さを知ることができました。改宗してから受けました召しは、私の信仰の実践の場でした。努力したあとには、必ず喜びがあり満足感をいただきました。今は、すばらしい姉妹と神殿結婚しふたりの子がいます。また、昨年の10月から私の両親と共に生活していますが、争いもなく楽しく生活できますことを、主に感謝しています。私たち夫婦はいつもこう思っています。「教会員でよかったね。」(つるぎ・あきお 1955年生まれ、名東北ワード部監督)

モルモンの声

名東北ワード部
川本光子



ある宣教師に、ひとりの求道者の方のためにモルモン経の吹きこみを頼まれたときのことで。

彼女は体の調子を崩し、一時的に目が悪くなり、モルモン経を読むことができない状態にありました。

しかし私は宣教師に「絶対できるはずがない」と答えました。しかし宣教師はあなたしか頼む人がいないと必死に頼むのです。

2日後、私は娘のラジカセを机の上に置き、導かれるままモルモン経を朗読していました。その夜です。宣教師が私に転勤の

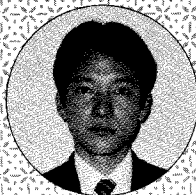
●名東北ワード部劔秋雄監督(左)と、名東南ワード部志村仁志監督



あいさつをしに来たのです。机の上に赤いラジカセとモルモン経が無造作に置かれているのを彼が見て、安堵の笑いを私に投げました。何も言わなくてもわかってくれたのです。

テープを吹き込むことのむずかしさは、すべての音が容赦なく録音されてしまうことです。新聞をめくる音、ドアの開け閉めの音までテープに入るのです。私の家族は教会員ではないのですが、夫も娘たちもとてもよく協力してくれました。2週間後に27巻のテープが完成しました。これは私の力ではありません。神の助けと宣教師の熱意の賜なのです。(かわもと・みつこ 1952年生まれ)

愛ある家庭を……



名東南ワード部
保田真吾

指 導者は、「私たちが永遠の生命を得るための最適の場所は家庭である」と言われています。愛に満ちた家族の中で私たちは霊的に成長し、昇栄する備えをすることができます。

私は改宗する前、両親に対してひどく反抗的でした。しかし、教会の教えを通して自分自身が成長することによって両親に対して心から感謝の気持ちを持つようになりました。これが神様から与えられた最高の祝福です。

改宗して1年半が過ぎたころ、父が危篤であるとの知らせを受け、急いで帰郷しました。医師から肺がんのため長くはないと聞かされていたので、心の準備はできていました。病院に着いたときにはもう意識はなく、苦しそうな呼吸をしながらときどき体を動かす程度でした。父の死の迫った顔を見ながら心の中で「今までよく頑張ってくれてありがとう」と何度も繰り返していました。10歳くらい年上の従姉から「お父さんは、あなたがここにいなくても名古屋で頑張っている事がわかれば安心するん

よ」と言われたときには、目の前が霞んで何も見えませんでした。

自分がどんなに強く反抗しても父は自分の事を受してくれていました。「愛は永く堪え忍び、親切であって、ねたまず誇らない」(モロナイ7:45)という聖句がありますが、父の愛はそのとおりのものでした。

天の父母の愛は現世における親の愛のようなものではないでしょうか。もし父が死ぬ前に、親に対する感謝の気持ちが得られていなかったら、一生苦しい思いをしなければならなかったでしょう。そう考えると、両親と自分を強く結び合わせてくださった主の導きを本当にありがたく思います。

この世でどんな大成功を納めても、家族が崩壊してしまえば決して幸福な生活を送ることはできません。普段は別々のことを考えていても、神様の教えによって皆が一致できるという点で福音のある家庭はすばらしいと思います。

自分も将来結婚し、福音に添った幸福な家庭を築きたいと思っています。幸福になれるかどうかは、自分自身の努力と選びにかかっています。そのためにも常に主のことを念頭に置いて、しっかりと福音の道を歩んでいきたいと思っています。(やすだ・しんご 1964年生まれ、長老定員会第二副会長)

真実の教会を知って



名東南ワード部
今井亜砂子

何 不自由なく、ただ漠然と自分のたよりにない価値観に左右され、学校生活に追われて生活していた私、ふと時々何か物足りなかったり、何かむなしかったり不安だったりして、「どうして毎日毎日いずれは死んでしまうのに生きていかななくてはならないのだろうか」と、とりとめもない疑問を持つことができました。

そんな、高校3年のある日、学校から帰る途中、自転車に乗っているとふたりの女

性に出会いました。後に、彼女たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師であることがわかりました。「私はアイダホから来たものです。よかったら私たちの教会を訪ねてみてください」と住所を手渡されました。少し興味があったので訪ねてみようと思ったところ教会の場所がわからず、そのときはそのまま、教会の事は忘れてしまいました。

それから1カ月後、アメリカでホームステイをすることになり、アイダホ州で末日聖徒の家族と暮らす機会にあずかったのでした。毎週家族の人と教会に集いました。家族と教会にある何かを私をひきつけている様で温かい気持ちを絶えず感じていたのを覚えています。しかし、言葉の壁は厚く、教会のことがよくわからないまま日本に帰ることになりました。

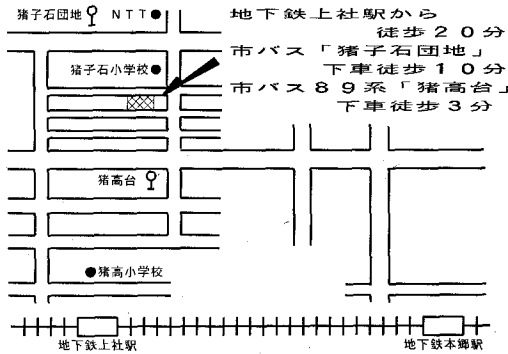
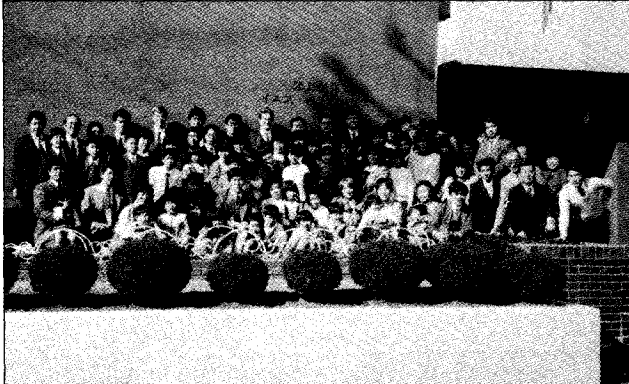
そして日本に帰ってきてから1ヵ月、また学校の帰り道にふたりの外人宣教師が自転車に乗っているのを見つけました。今度は自分から声をかけ、教会へ連れて行ってもらいました。そして宣教師をはじめとするたくさんのすばらしい兄弟姉妹にも出会えて、やっと救い主が示された道、人生のすばらしい目的を知ることができました。この教会がジョセフ・スミスによって回復された真実の教会であることの証がますます強まり、4月15日、桜の舞う中、バプテスマを受けることができました。たくさんの宣教師と出会い、最初の宣教師と会ったときから約1年してやっとバプテスマを受けることができました。

この世の中にはまだまだたくさんの人々が、この真実の教会を知る機会にあずかっていないのではないのでしょうか。また、教会の事を知っていても様々な理由のために教会に集えないでいる人々も大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。周りにいるすべての人が神様の大切な子供であり、私たちの大切な兄弟姉妹なのです。恵まれてこの教会に集い、聖餐を受けることができる

私たちにとって、ひとりでも多くの人々に信仰と希望と愛をもってこのすばらしき神様の福音を伝え、ひとりでも多くの人々を

教会へと導く手助けをすることは大切な役目だと思います。この手助けをさせていただくために、まじめに1歩1歩信仰生活を

歩んでいきたいと思います。(いまい・あさこ 1968年生まれ、扶助協会レクリエーション管理会員)



〒465
名古屋市東区
猪高台1-315
☎052(773)
4189

早朝セミナーの証

昨年、名東北、南ワード部合同で行なわれた早朝セミナーの証です。



セミナー教師
土田 準子

今年名古屋ステークス部、名東南北合同早朝セミナーが始まって3年目、ジョセフ・スミスが「地上における最も正確な書物であり、宗教のかなめ石」と語り、ベンソン大管長が「イエス・キリストの証におけるかなめ石」と証をされたモルモン経を勉強するというので、教師もその意気込みはとても大きなものでした。登録人数11人の内、2人が新登録者、4人がそれまで週1度の家庭学習であったため、最後まで不安と迷いがありました。大勢の仲間と一緒に勉強した方が楽しいと、監督さんが積極的に勧めてくださいました。

6時から始まるレッスンに間に合わせるためには、生徒たちは、月曜から金曜までの毎朝、5時から5時半までには起きなければなりません。また、直接学校に向かう生徒の家族は4時半に起きてお弁当を作り子供たちを送り出さなくてはなりません。教会社会は戒めを学ぶ者として、学校や大人の社会と同じように、またはそれ以上に信頼関係を大切にするように。特に遅刻や欠席をしないように、やむを得ぬときは、必ずその旨連絡するように、怠惰による遅刻や欠席を繰り返した場合は、みたまの励ましを受けて生活することがむずかしくな

ることなど、親も子ども教師と共に訓練を受ける場となりました。

雨の日に水煙を立てて次々と坂を登ってくる自転車のライトや、朝もやにゆれるセーラーカラーの少女たちに、私は心の中で何度も尋ねました。テスト期間中で睡眠不足が続いているのに、パレーの対外試合で疲れているのに、雨のぬかるみに倒れて制服が泥まみれになっても、自転車のチェーンが外れて手が油で真っ黒になっても、スカートのひだがとれるほどびしょ濡れになっても、あなたたちはなぜ来るのですかと。モルモン経が神様のみ言葉でなかったら、ジョセフ・スミスによって真理の原則が回復されなかったら、この若者たちが学業、クラブ、趣味、友達への関心を越えて早朝セミナーに身と霊を向かわせることはなかったと思います。わかりにくいことのアまりにも多い世の中にあって、モルモン経には永遠に変わらない福音の真理とあらゆる人をご自分のところへ引き寄せるために愛する独り子の命を犠牲になされた(IIニーフアイ26:24)神様の愛が絶えず行間に流れていることを知っているからだと思いました。

「バプテスマを受けるとすぐ監督さんが来て、早朝セミナーで勉強するように勧められました。それまでは学校でも家庭でも、人を愛することを知りませんでした。でもセミナーのクラスの一人一人が、お互いに愛し合い親切にしている姿をみて、

愛することの尊さやすばらしさを知りました。そして今私は学校や家庭で、少しずつ人を愛する喜びを知るようになりました。」

「私は始めのうちすごいひねくれやの問題児だったけれど、今は前よりも素直に物事を考えられるようになりました。」

「セミナーを受けるようになって、今まで気づかなかったことに感動したり感謝したりする心が育ち、生活の中に聖句を応用できるようになってきました。悩んでいるときモルモン経からたくさんの助けをもらいました。マスター聖句を実践しようとしているクラスみんなの思いやりや、やさしさ、気遣う心を見て反省しました。福音を取り入れて生きている人はやっぱり違いました。セミナーを受けて本当によかったと思います。」レッスンの最終日に分けてくれた証です。

彼らが今日霊によって生まれ神の子になっていく姿(アルマ5:14参照)を目の当たりにして教師としてどんなにうれしかったか神様にぜひとも知っていただきたいと思いました。

セミナーは彼らが天父の息子、娘として昇業に向かって歩みを早め、救いを達成させることができるように助けてくれる神様のプログラムであることを心から証いたします。(つちだ・じゅんこ 7月1日付けで、日本札幌伝道部に伝道部長の勝兄弟と共に着任)



名東北ワード部
池田隆浩

ほくにとってこれほど良い日々を送ったことはありませんでした。すごく楽しく勉強できました。指導者の方々に早朝セミナーを勧められ、親には、「あなたは朝起きるのが苦手だからやめときなさい」と言われ大変迷いました。しかし断食をしたり、祈ったりして、結局出席することにしました。8カ月間毎日5時起きで、往復25キロの道のりを通わなければいけないのかと思うと不安でした。

セミナーに出席するには、もうひとつの試練がありました。それは部活です。ほくは初め、部活には入らないつもりでいました。しかし、ほくの高校には、絶対に入らなければならないという規則がありました。ほくは運動が好きなので、卓球部に入ることになりました。早朝練習があったり、日曜日の練習があると思い、先生に教会に行っていることや、セミナーというプログラムがあり、早朝練習に出られないことなどを話しました。幸い、卓球部は日曜日が休みで、すごくうれしく思いました。先輩にも早朝練習に出られないことを話すと、快く理解してくれました。これはすべて神様の導きだと感謝しています。

ある人がこういうことを言いました。「偶然、それはなんとすてきな出会い。」しかし、土田姉妹は、いつも「この世には、偶然はありえない。すべて神様のみ心がそこに表われる」と言いました。ほくもそれを信じています。両親が教会員であるという家庭環境の中で、このようなすばらしいワード部に集うことができ、セミナープログラムに参加することができたことを神様に感謝しています。試練は多いかもしれませんが、その中から霊的に一步一步成長することができます。困ったとき、悲しいときの助け人になることができます。多くの喜びと感謝で心が満たされます。8カ月間、いろいろな試練がありましたが、土田姉妹や、セミナーの仲間へ助けられ、やり遂げることができました。しかし、風邪などで、二日休んで皆勤賞が取れなかったのが残念です。今年のセミナーは体も鍛えて皆勤賞をねらいたいと思います。多くの犠

牲を払って関心を示してくださった指導者の兄弟姉妹、そして両親に感謝しています。また、神様はほくたち青少年一人一人をいつも愛して見守ってくださることを証します。(いけだ・たかひろ 1971年生まれ、祭司定員会会長補佐)



名東南ワード部
日坂 睦

ほくたちのセミナーは早朝セミナーなので、月曜日から金曜日の6時から7時まで行ないます。ほくは高校3年生なので、やはり最後のセミナーに対する心構えはいつもの年とは違うものがありました。クラス会長としての責任は重すぎると思いましたが、自分なりにみんなのことを心に留めて8カ月間がんばったつもりです。

ほくがしたことではいつもの年と違ったことは、モルモン経の大事だと思ふ聖句を余白の所に抜き出したり、いろいろと書き込んだりしたことです。ときにはその作業に3時間以上かかる時もありました。しかしそれを行なったためにすばらしいことができるようになりました。人から相談を受けたとき、その人のためになるだろうと思う一節を、モルモン経から見つけることができるようになった、ということです。ほくみたいな子供の言葉ではアドバイスにならないけれども、神様の言葉によってアドバイスできるようになったのは、すばらしいことだと思います。教義と聖約に、アロン神権の義務として、説き、教えるという義務がありますが、セミナーを通して聖典をよく味わって読むことにより、だれに対してでもこの義務を立派に果たすことができるようになることを証します。

また、モルモン経の言葉は人に勇気と平安をもたらす力があり、たったひと言にも、深い深い意味があることがわかりました。また、多くの証を得るために、神さまがすばらしい環境を用意してくださり、「名東南ワード部の会員で本当によかったな」と思うほど明るくて、やさしくて、個性的な兄弟姉妹、教師とともに、セミナーを受けることができたことに心から感謝します。

最後になりますが、霊的にも成長している、また多くの祝福を感じるためには、神様のために喜んで時間を費やすことが不可欠であることを証します。これからも多くの時間を天のお父さまのために使わせていただこうと思います。(ひさか・おつみ 1970年生まれ、若い男性第一副会長)



名東北ワード部
山田早知子

1987年4月6日、早朝セミナーに出席して思ったこと。「何て楽しいだろう。」初めての早朝セミナーということであるいろいろ不安もありましたが、とにかく楽しくて仕方ありませんでした。朝は眠たいけれどセミナーが永遠に続けばいいなどしばしば思いました。あまりセミナーが好きでなかった私がこんなにまで好きになれたのは、8カ月間一緒に学んだ仲間と尊敬すべき教師のおかげです。

この8カ月間でほかにたくさん祝福がありました。セミナーが終了してしまった今、毎日の生活に寂しさと物足りなさを感じています。恵まれて4年間受講することができましたが、嫌いなままで終了しなかったことをうれしく思います。そして私たちの宗教のかなめ石であるモルモン経を一番しっかり勉強できたのは、本当に大きな祝福だと思います。

あの楽しかった日々はもう二度と戻って来ないと思うと寂しくなってきます。セミナーの仲間の愛と友情は学校の友達よりはるかに大きいです。8カ月間で他人の気持ちや考え、隣人を愛することを学びました。その愛の大きさに感動することもありました。ほかの人たちの模範に従って、私も心のやさしい、温かい人間になりたいと思いました。

思い出にすがりつくのはいけないけれど、私はこの8カ月間を忘れてたくないし、ほかの仲間にも忘れてほしくありません。そんな思い出にさせてくれたセミナーに出席できたことに心から感謝しています。(やまだ・さちこ 1969年生まれ、扶助協会オルガニスト)

渋谷ブックセンターからのお知らせ

初等協会(プライマリー)クラス用テキスト

従来テキストと視覚教材のセットで販売してまいりました初等協会クラス用テキストは、多くの方にご利用いただくために、テキスト(教師用引き)と視覚教材(絵・写真のセット)を各々単品(各600円)でご注文をお受けするようにしました。家庭の夕べのレッスンやホームティーチングなどでも幅広くご活用ください。テキストと視覚教材の別売りは、今年度7月1日より実施いたしました。なお、各品のカatalog番号は、以下のとおりです。



PCPR06CAJA	ひかり：教師用引き	PCPR07CAJA	ひかり：視覚教材セット
PCPR08G7JA	星コースA：教師用引き	PCPR09G7JA	星コースA：視覚教材セット
PCPR10B0JA	星コースB：教師用引き	PCPR11BQJA	星コースB：視覚教材セット
PCPR12D6JA	CTRコースA：教師用引き	PCPR13D6JA	CTRコースA：視覚教材セット
PCPR14B8JA	CTRコースB：教師用引き	PCPR15B8JA	CTRコースB：視覚教材セット
PCPR16D3JA	勇者コースA：教師用引き	PCPR17D3JA	勇者コースA：視覚教材セット
PCPR18C6JA	勇者コースB：教師用引き	PCPR19C6JA	勇者コースB：視覚教材セット
PCPR20C4JA	明るい少女A：教師用引き	PCPR21C4JA	明るい少女A：視覚教材セット
PCPR24C1JA	開拓者A：教師用引き	PCPR25C1JA	開拓者A：視覚教材セット
PCPR26E7JA	コース11：教師用引き	PCPR27E7JA	コース11：視覚教材セット

価格変更(値下げ)のお知らせ

以下の商品の販売価格を変更いたしました(1988年7月1日より実施)。なお、売り切れ後絶版となりますので、ご注文はお早めをお願いいたします。

カタログ番号	商品名	旧価格	新価格
TDC00001	絵はがき8枚セット	60円	10円
TDC00002	絵はがき5枚セット	50円	10円
PXYW4363JA	若い女性キャリーボックス	260円	50円



扶助協会ポスター

VVOQ0023JA 600円



扶助協会の使命、神を信ずる、教会の家族を強める、愛の奉仕を行なう、神権者を支持する、ノーヴーにおける扶助協会の設立
(計6枚)

インスティテュート(新刊)

「旧約聖書生徒用資料列王記上-マラキ書」

PMS1103JA 1500円



本コースでは旧約聖書の後半(列王紀上からマラキ書まで)を扱う。難解な聖句の理解を助ける注解、地図、図表など聖典研究を系統立てて進める資料として活用できる。